

# 国道道路改築委託(久留里) 埋蔵文化財調査報告書 2

—君津市上新田張山遺跡・青柳向台遺跡—

平成19年9月

千葉県土整備部  
財団法人 千葉県教育振興財団

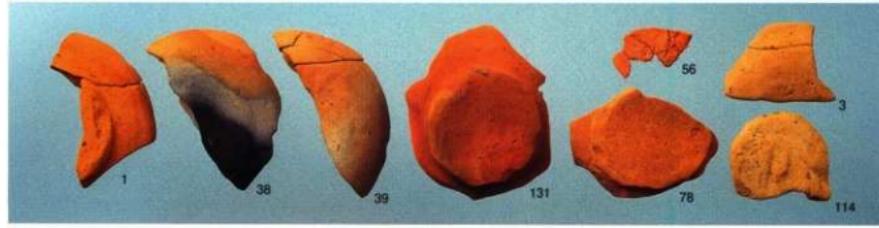
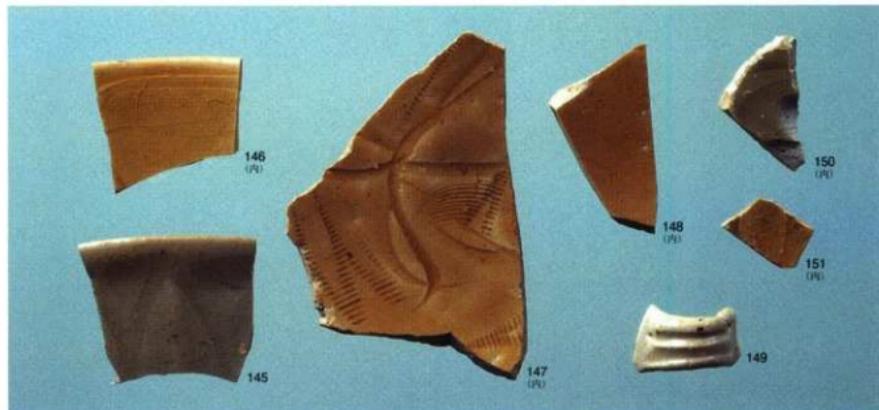
# 国道道路改築委託(久留里) 埋蔵文化財調査報告書 2

きみつ かみにっ た はりやま あおやぎひかいだい  
—君津市上新田張山遺跡・青柳向台遺跡—





1. 上新田張山遺跡空中写真



2. 上新田張山遺跡出土土器

## 序 文

財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第587集として、千葉県県土整備部の国道410号（久留里）道路改築事業に伴って実施した君津市上新田張山遺跡及び青柳向台遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、中世初頭の掘立柱建物跡や井戸、区画溝が発見されるなど、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また地域の歴史解明の資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を始めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成19年9月

財団法人 千葉県教育振興財団

理事長 福島義弘

## 凡　　例

1 本書は、千葉県県土整備部による国道道路改築委託（久留里）に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

2 本書は、下記の遺跡を収録したものである。

千葉県君津市上新田字張山24-2ほか 上新田張山遺跡（遺跡コード 225-031）

千葉県君津市箕輪字菊沢998ほか 青柳向台遺跡（遺跡コード 225-032）

3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県県土整備部の委託を受け、財團法人千葉県教育振興財團が実施した。

4 発掘調査から整理作業、本書の執筆・編集に至るまで、上席研究員 半澤幹雄が担当し、実施期間等は本文中に記載した。

5 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、千葉県県土整備部君津地域整備センター、君津市教育委員会の御指導・御協力を得た。

6 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。

第1図 君津市役所発行 1/2,500地形図 「君津市地形図K-6」（平成3年9月）

第2図 国土地理院発行 1/25,000地形図 「久留里」（NI-54-20-13-3）

7 調査地周辺の航空写真（図版1-1）は、京葉測量株式会社が昭和42年3月に撮影したものを1/10,000に拡大して使用した。

8 本書で使用した図面の方位はすべて座標北である。測量値については、道路建設工事設計図面等との整合性をはかるために日本測地系を使用した。なお、世界測地系に基づく数値は下表のとおりである。下表の数値は「Web版TKY2JGD Ver.1.3.79」により、パラメーターは「関東.par Ver.2.1.1」を使用した。

9 土層の色調の表記に当たっては、小山正忠・竹原秀雄「新版標準土色帖」2002年版 日本色研事業株式会社を参考にした。土器類の色調の表記に当たり土器觀察表では同書を参考に「色相 明度／彩度」を表記し、本文中では見た目の印象を優先して表記した。

10 復元実測が困難な土器については断面図内・外面図もしくは拓本を必要に応じ掲載したが、断面図は右側が外面となることを原則とし、右に外面、左に内面を配した。

11 挿図に使用したスクリーントーン及び記号の用例は、各図に示したとおりである。

		上新田張山遺跡		青柳向台遺跡
		1A-00（基点）	5E-00（SB006北東）	19T南（SD001北端）
日本測地系 (旧日本測地系) (Tokyo Datum)	X座標 Y座標 北緯 東経	-76,700.000m 21,000.000m 35° 18' 30.06305" 140° 03' 51.45883"	-76,780.000m 21,080.000m 35° 18' 27.46062" 140° 03' 54.61886"	-76,980.000m 21,240.000m 35° 18' 20.95752" 140° 04' 00.93502"
世界測地系 (日本測地系2000) (JGD2000)	X座標 Y座標 北緯 東経	-76,343.8929m 20,706.1288m 35° 18' 41.90542" 140° 03' 39.75887"	-76,423.8915m 20,786.1276m 35° 18' 39.30340" 140° 03' 42.91871"	-76,623.8873m 20,946.1253m 35° 18' 32.80129" 140° 03' 49.23454"

# 本文目次

第1章 はじめに.....	1
第1節 調査に至る経緯.....	1
第2節 遺跡の位置と歴史的環境.....	3
1 遺跡の位置と地理的環境.....	3
2 遺跡周辺の歴史的環境.....	3
第2章 上新田張山遺跡.....	5
第1節 調査の方法と基本層序.....	5
1 調査の方法.....	5
2 基本層序.....	7
第2節 遺構.....	8
1 中世.....	8
2 その他の時代.....	19
第3節 遺物.....	22
1 土器.....	22
2 土製品.....	29
3 金属製品.....	29
4 石製品.....	30
第3章 青柳向台遺跡.....	37
第1節 調査の方法と基本層序.....	37
1 調査の方法.....	37
2 基本層序.....	37
第2節 遺構.....	37
第3節 遺物.....	39
1 土器.....	39
2 土製品.....	39
3 金属製品.....	39
4 石器・石製品.....	39
第4章 まとめ.....	41
報告書抄録.....	卷末

## 挿図目次

第1章 はじめに	第17図 中世土器2（土師質土器2）	24
第1図 調査地と周辺地形	第18図 中世土器3（土師質土器3）	25
第2図 遺跡の位置と周辺の遺跡	第19図 中世土器4（土師質土器4）	26
	第20図 中世土器5（陶磁器）	27
第2章 上新田張山遺跡	第21図 その他の時代の土器	28
第3図 トレンチ・本調査区と基本層序	第22図 土製品	29
第4図 柱穴実測風景	第23図 金属製品	29
第5図 挖立柱建物跡計測図	第24図 石製品	30
第6図 中世遺構平面図1（A区-1）		12
第7図 中世遺構平面図2（A区-2）	第3章 青柳向台遺跡	
第8図 中世遺構平面図3（A区-3）	第25図 トレンチ・本調査区と基本層序	38
第9図 中世遺構平面図4（B・C区）	第26図 遺構平面図	38
第10図 中世溝状遺構断面図	第27図 溝状遺構断面図	39
第11図 中世井戸1（SE001）	第28図 土器	40
第12図 中世井戸2（SE002・003・004）	第29図 土製品	40
第13図 その他の時代遺構平面図1（A区）	第30図 金属製品	40
第14図 その他の時代溝状遺構断面図	第31図 石器・石製品	40
第15図 その他の時代遺構平面図2（B・C区）		
	21 第4章 まとめ	
第16図 中世土器1（土師質土器1）	第32図 上新田張山遺跡中世初頭遺構変遷図	42

## 表 目 次

第1表 上新田張山遺跡柱穴一覧表	31
第2表 上新田張山遺跡出土遺物組成表	33
第3表 上新田張山遺跡掲載土器観察表	34

## 図版目次

### 卷頭図版

1. 上新田張山遺跡空中写真
2. 上新田張山遺跡出土土器

### 写真図版

- 図版1 1. 調査地周辺の航空写真

#### 上新田張山遺跡

- 図版2 1. A区空中写真  
図版3 1. A区全景  
2. A区西半上面全景  
3. SD007 完掘状況  
図版4 1. SE001 完掘状況  
2. SE002 完掘状況  
3. SE002 断面  
図版5 1. SE003 完掘状況  
2. SE003 断面  
3. B区SE004 断面

- 図版6 1. B区SD017B・018B・025 完掘状況

2. C区SD017C・018C 完掘状況

- 図版7 1. B区SD017B・018B・025 断面  
2. C区SD017C・018C 断面  
3. C区SD019～024 完掘状況

- 図版8 土器1

- 図版9 土器2

- 図版10 土器3・土製品・金属製品・石製品

### 青柳向台遺跡

- 図版11 1. SD001・002 完掘状況  
2. SD001 完掘状況  
3. SD001 B-B' 断面  
4. SD001 C-C' 断面  
図版12 1. SD001・002 A-A' 断面  
2. SD002 完掘状況  
3. 土器・土製品・金属製品・石器・石製品

# 第1章 はじめに

## 第1節 調査に至る経緯（第1回）

千葉県は君津市上新田地区、箕輪地区における国道410号線の新設及び拡幅事業の開始にあたって、埋蔵文化財の有無と取扱いについて、千葉県教育委員会に照会した結果、かつて君津市教育委員会が確認・本調査を実施した隣接地に今回の工区が展開することがわかった。その後、取扱いについて慎重な協議を重ねた結果、事業計画の変更が困難なため、記録保存の措置を講ずることとなり、調査は財団法人千葉県教育振興財團に委託されることとなった。

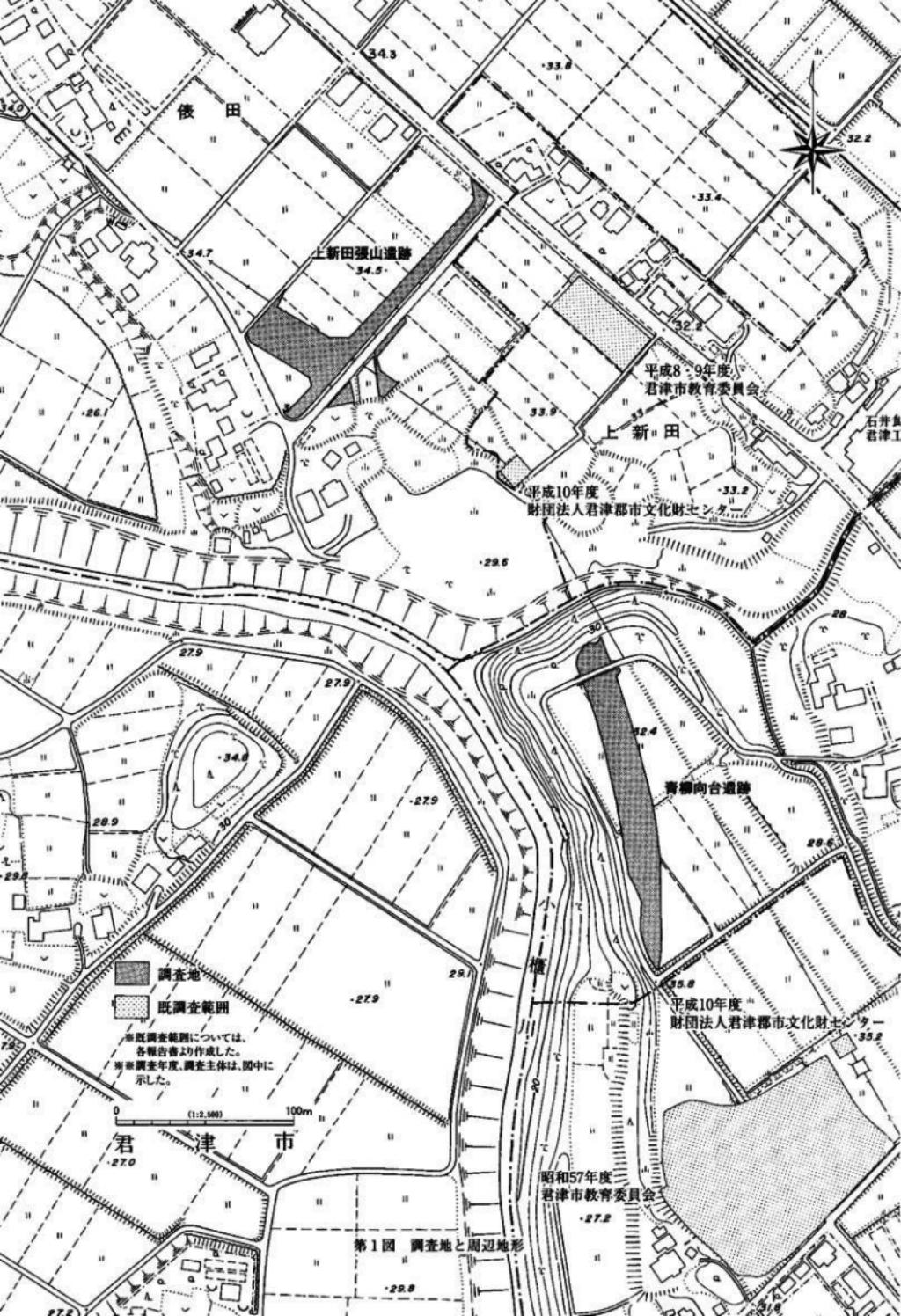
発掘調査から整理作業・報告書刊行に至るまでの調査組織及び担当者は以下のとおりである。

### 平成18年度

期 間 平成18年10月16日～平成18年12月15日（発掘）  
組 織 調査研究部長 矢戸三男 南部調査事務所長 高田 博  
担当職員 上席研究員 半澤幹雄  
内 容 上新田張山遺跡（発掘）  
確認調査（上層）301/2,700m<sup>2</sup>  
本調査（上層）1,220m<sup>2</sup>  
期 間 平成18年12月16日～平成19年1月31日（発掘）  
平成19年2月1日～平成19年2月28日（整理）  
組 織 調査研究部長 矢戸三男 南部調査事務所長 高田 博  
担当職員 上席研究員 半澤幹雄  
内 容 青柳向台遺跡（発掘）  
確認調査（上層）498/2,800m<sup>2</sup>  
上新田張山遺跡（整理）  
水洗・注記・記録整理・分類・接合・実測の一部まで

### 平成19年度

期 間 平成19年4月1日～平成19年7月31日（整理）  
組 織 調査研究部長 矢戸三男 南部調査事務所長 西川博孝  
担当職員 上席研究員 半澤幹雄  
内 容 上新田張山遺跡（整理）  
実測の一部・トレース・拓本・撮影・挿図・図版・原稿・編集・校正・刊行  
青柳向台遺跡（整理）  
水洗・注記・記録整理・分類・接合・実測・トレース・拓本・撮影・挿図・図版・原稿・  
編集・校正・刊行



## 第2節 遺跡の位置と歴史的環境

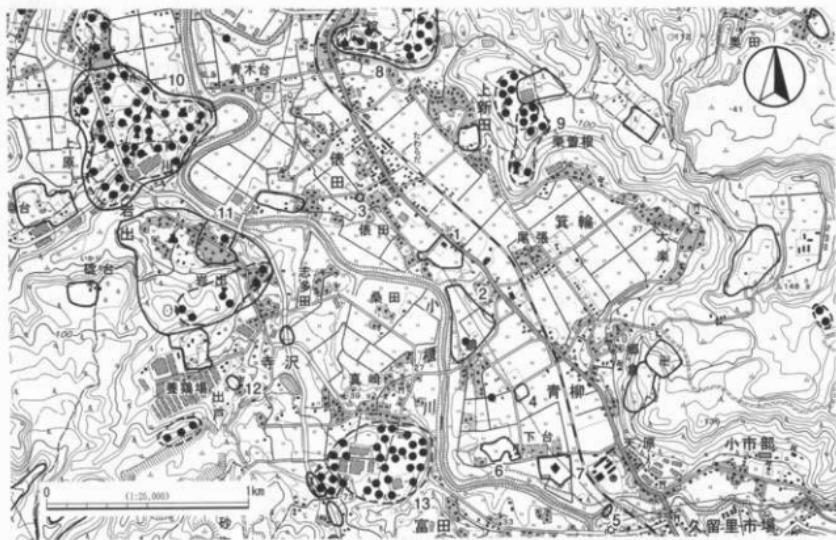
### 1 遺跡の位置と地理的環境（第2図）

上新田張山遺跡、青柳向台遺跡の所在する君津市は、東京湾を望む房総半島西半部中央に位置する。市域の西半は小糸川の源流から河口までの流域を包括し、東半は小櫃川の上・中流域にある。遺跡の所在する君津市上新田・箕輪周辺は、地形的には北東から南西に斜行する境界線を示す両總台地と房総丘陵の境目、地質的にも同様の境界線となる上総層群上部と下総層群の境目にあたる。遺跡の西を流れる小櫃川は元清澄山に源流を発し、西偏しながら北流して東京湾に流入する。周辺の地形は約10,000年前まで進行した小櫃川の下刻が小櫃川埋没谷を形成し、その後約4,000年前までの間に繩文海進と呼ばれる海水面上昇の影響により小櫃川が堆積に転じたため上流からの土砂により埋没していたものと考えられており、再び海水面の低下と土地隆起の影響で下刻に転じた小櫃川が段丘を形成しながら下刻し現在に至ったとされる。遺跡の所在する沖積段丘である久留里Ⅲ面は小櫃川が堆積から下刻に転じた4,000年～5,000年前に形成されたと考えられており、この時期に離水したものであろう<sup>1)</sup>。

### 2 遺跡周辺の歴史的環境（第2図）

上新田張山遺跡、青柳向台遺跡の周辺には「小櫃の三大古墳」と称される上新田の浅間神社古墳、俵田の白山神社古墳、岩出の飯籠塚古墳をはじめとして多くの遺跡が分布する。ここでは、今回の調査成果と関連すると判断される発掘調査例を中心にその概要を紹介する。

上新田張山遺跡（1）は君津市教育委員会から委託を受けた財團法人君津都市文化財センターにより平成8年度に確認調査が実施され、中世の土師質土器と掘立柱建物跡3棟が検出されたため、平成9年度に



1 上新田張山遺跡 2 青柳向台遺跡 3 俵田荒久遺跡 4 青柳下原遺跡 5 青柳天王遺跡 6 青柳西の前遺跡  
7 青柳宮の前遺跡 8 白山神社古墳群 9 上新田古墳群 10 戸崎城山遺跡 11 岩出遺跡 12 寺沢出戸遺跡 13 寺沢古墳群

第2図 遺跡の位置と周辺の遺跡

その一部の本調査を実施している。調査地点は今回の調査区の東約100mにあたり、本調査の成果では中世初頭の掘立柱建物跡2棟以上を構成する柱穴、土坑2基、溝2条、中世以前の水田跡、近世の溝を調査している<sup>2)</sup>。平成10年度にも同財団による調査が実施されているが、遺構・遺物は確認されていない<sup>3)</sup>。

上新田張山遺跡と連続する段丘上では、北約500mに位置する俵田荒久遺跡（3）を平成10年度に財団法人君津都市文化財センターが発掘調査を行い、奈良時代と考える水田跡1面を検出している。

青柳向台遺跡（2）は君津市教育委員会により昭和56年度に試掘調査が行われ、翌57年度にその成果を基に君津市教育委員会から委託を受けた財団法人君津都市文化財センターにより発掘調査が行われている。調査地点は今回の調査区の南約100mにあたり、弥生時代後期の壺棺墓1基、奈良時代の堅穴住居跡3軒、中世の掘立柱建物跡3棟・井戸1基等を調査している<sup>4)</sup>。平成10年度にも同財団による調査が実施されており、中世の溝と水田跡、近世以降の溝を調査している<sup>5)</sup>。

青柳向台遺跡と連続する段丘上では、南約300mに位置する青柳下原遺跡（4）が平成10年度に財団法人君津都市文化財センターによる発掘調査が実施され、古墳時代の溝、平安時代の溝、道路跡、水田跡が検出され、南約1kmに位置する青柳天王遺跡（5）でも同年に発掘調査が実施され、平安時代の道路跡と土坑を調査している。また、南約500mの青柳西の前遺跡（6）、青柳宮の前遺跡（7）では昭和56年に各遺跡の発掘調査会により確認調査を主体とする発掘調査が実施され、青柳西の前遺跡では古墳時代後期の堅穴住居跡や中世初頭のピットが確認され、ピット内から完形の土師質土器小皿が出土している<sup>6)</sup>。

小櫃川右岸の丘陵先端部には白山神社古墳を有する白山神社古墳群（8）やその南に浅間神社古墳を有する上新田古墳群（9）が分布している。

小櫃川の対岸に目を転ずれば上新田張山遺跡の北西1.5km、標高約38m～50mの台地上に展開する戸崎城山遺跡（10）では財団法人君津都市文化財センターや当財団により数次の発掘調査が実施されており、縄文時代早期から中世までの遺構・遺物が検出され、特に古墳時代中期の堅穴住居跡が多く確認されている。また、戸崎城山遺跡は戸崎古墳群と戸崎城跡を包括しており、戸崎古墳群では現在までに96基の古墳が確認され、墳丘が消滅している古墳も含めれば総数は150基を上回る県内でも有数の群衆墳である。なお、平成6年度に実施された戸崎古墳群6号墳の調査では、土坑内から12世紀後半の年代が推定される渥美窯小型壺1点、土師質土器小皿10点が出土し、上新田張山遺跡と同時期の遺構として特筆される<sup>7)</sup>。平成7年度に実施された戸崎城山遺跡Q地点の調査では、中・近世の溝や土坑と龍泉窯系青磁が出土している<sup>8)</sup>。上新田張山遺跡の西800m、標高約40～45mの台地上には縄文時代～平安時代までの堅穴住居跡を検出した岩出遺跡（11）が位置し、飯糰塚古墳を有する岩出古墳群や中世の砦の可能性が考えられている岩出城跡を包括する。岩出遺跡の南東には寺沢出戸遺跡（12）が位置し、古墳時代後期～平安時代の堅穴住居跡が検出されている。青柳向台遺跡の南西500m、戸崎城山遺跡の南東1.5kmには戸崎古墳群に次いで多くの古墳が確認されている寺沢古墳群（13）が位置する。

注1 吉村光敏 1982「土地のなりたち」『木更津市史 富来田編』 木更津市

白井哲之 1976「小櫃川沿岸の段丘地形形成に関する予測的研究」『千葉大学教育学部 研究紀要』第25巻 千葉大学教育学部

2 松本 邦 1997「平成8年度 千葉県 君津市内遺跡発掘調査報告書」 君津市教育委員会

能城秀喜 1996「平成9年度 千葉県 君津市内遺跡発掘調査報告書」 君津市教育委員会

3 諸星典典 1999「夷隅鐵塔建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書」 財団法人君津都市文化財センター

4 小石 誠ほか 1983「青柳向台遺跡発掘調査報告書」 君津市教育委員会

5 注3に同じ。

6 意志泰正 1982「青柳西の前遺跡」 君津市教育委員会

7 弥生 南 1995「平成6年度 千葉県 君津市内遺跡発掘調査報告書」 君津市教育委員会

8 伊藤伸久ほか 1996「平成7年度 千葉県 君津市内遺跡発掘調査報告書」 君津市教育委員会

## 第2章 上新田張山遺跡

### 第1節 調査の方法と基本層序

#### 1 調査の方法（第3図）

上新田張山遺跡は主に新設道路部とそれに取り付く現道拡幅部からなり、新設道路部では道路の両側、拡幅部では現道に添うように計11本のトレーニングを設定し確認調査を実施した。確認調査の面積は計301m<sup>2</sup>である。

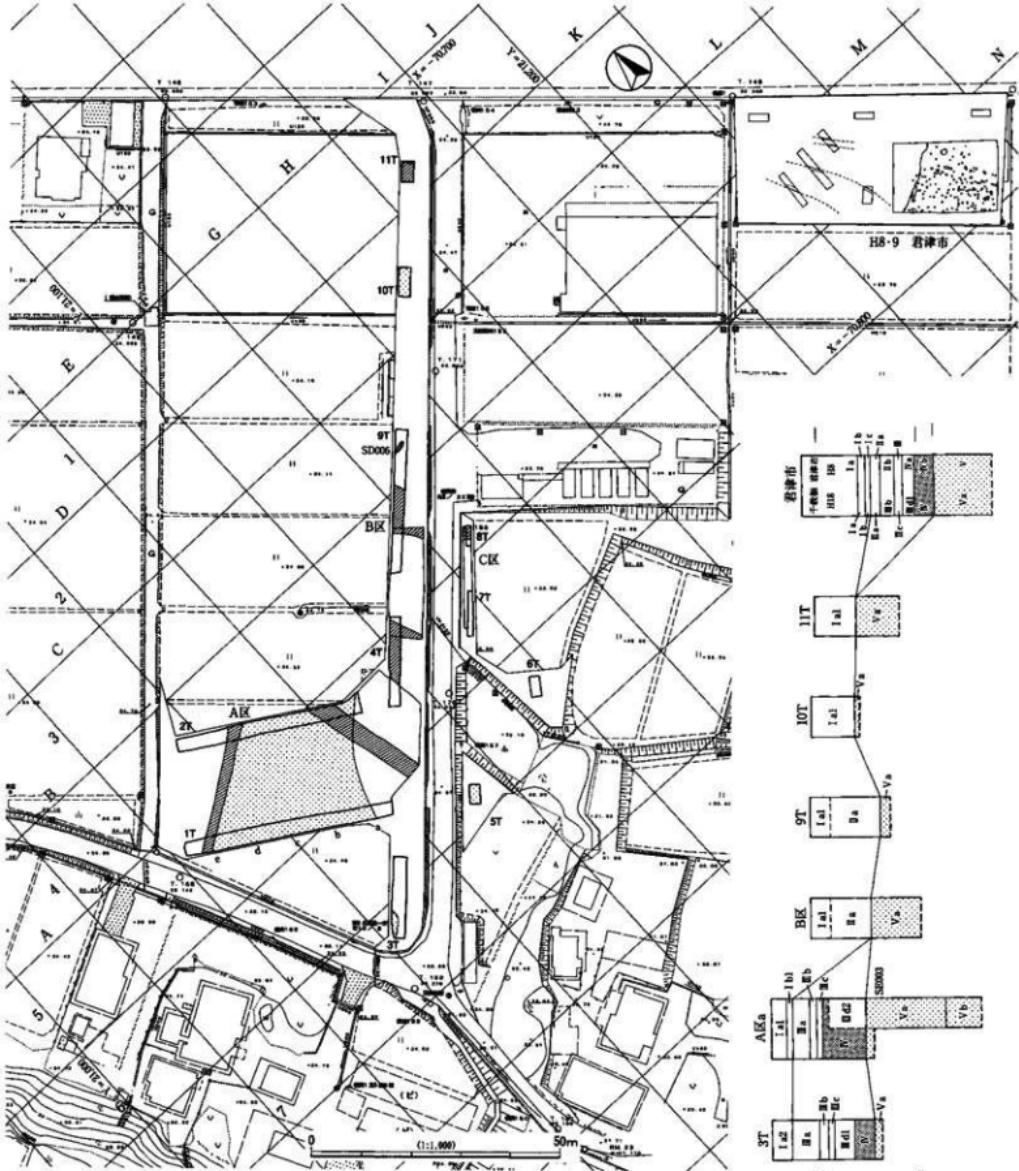
確認調査の図面作成にあたっては事業者により設置された用地境界杭（幅杭）を使用し平面図を作成するとともに、用地測量などのために設置された既存の多角点上の標高を使用し断面図等を作成した。確認調査により、中世の掘立柱建物跡と考えられる柱穴や井戸・溝、古墳時代後半の農耕にともなうと考えられる溝が新設道路部を中心に検出されたため、新設道路部の大半と周辺の拡幅部において本調査を実施することとした。本調査範囲は全体で1,220m<sup>2</sup>で、新設道路部970m<sup>2</sup>をA区、道路拡幅部の北西側160m<sup>2</sup>をB区、道路拡幅部の南東側90m<sup>2</sup>をC区と呼称した。ただし、隣接地との境界に崩落防止等のための余剰帯をとる必要があったため、実際の調査範囲は若干狭小となっている。

本調査の実施にあたり、表土除去後に本調査区内を中心に前述の多角点を使用し、20m×20mの大グリッドを設定し、さらにその中に2m×2mの小グリッドを設定した。大グリッドはX=76,700m、Y=21,000mを起点とし、南に1、2、3・・・、東にA、B、C・・・とし、1A、2B、3C・・・と表記した。小グリッドは北西隅を00とし、東に01、02、03・・・と1の位を増し、南に10、20、30・・・と10の位を増す00~99の小グリッドを設定した。これにより、各グリッドは1A-00などと表記し、同時に北西隅の座標点を意味することとした。

実測にあたりA区では検出面に1m~4mごとに釘を打ち付け、水糸を使用して実測する簡易造り方測量を実施した。釘の打付けは調査地内の大グリッドごとに設置した方眼杭を使用して10m方眼となるよう測量杭を設置した後、光波測距儀を使用して直交方向と斜め45°方向に放射状に1mないしは2mの方眼となるよう釘を打ち付け、隣接する釘が2mを超える場合は各釘を使用して2m×2mのメッシュ状に釘を設置した。遺構平面図の作成にあたっては調査地全体を覆うように図面を割り付け、割付けにしたがって図化した。割付けは大グリッド(20m×20m)の中を東西2列、南北4枚の計8枚の図面に割り付け、西側の列の北から南へ1番から4番までの番号を付し、東側の列にも同様に北から南へ5番から8番までの番号を付した。個々の図面には大グリッド名と大グリッドでの総枚数を分母とし各番号を分子とする図面番号を付し、大グリッドの中で図面が不要となる範囲のある場合は総枚数である分母が減り、それに応じて各番号の分子も前に詰めている。これにより、5D-1/8、6E-1/5などと標記した。

B・C区では調査区が斜め45°となるため、調査区内に斜め方向の基準点を設置し、遺構も溝に限定されたことから平板測量による実測を実施した。

遺構の調査にあたっては、遺構の内容ごとに略号を使用し、その下に3桁の番号を付した。使用した略号は柱穴：SH、溝：SD、井戸：SEである。掘立柱建物跡：SBと構列跡・塙跡：SAは現地である程度の組合せ作業を行った後、整理段階で新たに登録することとした。よって、すべての柱穴にSHの略号が与えら



第3図 トレンチ・本調査区と基本層序

れることになるが、現地での煩雑さを避けるために遺物の出土した柱穴にのみSHの略号と番号を付し、その他の柱穴については整理段階で連続する番号を付した。

## 2 基本層序（第3図）

基本層序については、A区本調査区西南壁（1トレンチ西南壁）において作成した土層柱状図、3・9～11トレンチの土層図及び平面図、SE002、SE003の土層断面図の整合を図り作成した。整合を図るために近似した層は同一層とし代表的な層名等を充て、I層を現耕作土及びその床土、II層を近世・近代以降の整地等に係わる土層、III層を古墳時代後期以前で且つ段丘面の離水期以降に堆積したと考えられる土層、IV層を離水期以前の沖積層で離水期後に腐植が進み黒色化したと考えられる層、V層をその下の離水期以前の沖積層とした。各層の細分については上からa・b・c…を用い、地点による差異や変質、微細分については1・2・3…を用いてIa1層などと表記した。

### 基本層序

I a1層	7.5YR4/1	灰褐色シルト混じり細砂層	III d2層	10YR7/2	灰白色粘土層
I a2層	5PB4/1	暗青灰色粘土層		2.5Y2/1	黑色粘土層
		下部に5P2/1紫黒色マンガン沈着層		5Y5/1	灰色粘土層
		が見られる。			3層が互層を成す。
I b層	5Y3/1	オリーブ黒色シルト層	IV 層	10YR3/1	黒褐色細砂混じり粘土層
II 層	5Y5/2	灰オリーブ粘土層	Va層	5Y7/3	浅黄色シルト混じり粘土層
III a層	10YR3/1	黒褐色シルト混じり粘土層	Va1層	5Y7/4	浅黄色細砂層
III b層	5YR8/5	明赤褐色シルト混じり粘土層 酸化鉄・マンガンの沈着層	Va2層	2.5Y5/2	暗灰黄色砂層
III c層	5Y7/4	浅黄色粘土層	Va3層	5Y7/3	浅黄色シルト混じり粘土層
III d1層	5Y4/1	灰色シルト混じり粘土層	Va4層	7.5Y6/2	灰オリーブシルト混じり砂層
			Vb層	10YR6/8	明黄褐色砂層

平成8・9年度に実施された君津市教育委員会の確認・本調査地点<sup>1)</sup>との基本土層の整合はIb層、Ic層が、現耕作土と床土にあたり、今回のIa層、Ib層に相当する。下部のIVa層が暗茶色粘土層、IVb層が黒褐色粘土層、V層が黃灰色シルト土層で、特にV層を混入物の少ない深くまで達する層としており、今回の調査地点Va層に相当すると判断されることから、それぞれIII d1層（灰色シルト混じり粘土層）、IV層（黒褐色細砂混じり粘土層）、Va層（浅黄色細砂層）に対応することが妥当である。よって間層であるIIa層、IIb層、III層が今回のIIIa層、IIIb層、IIIc層に比定される。

平成8・9年度の調査ではII層とIII層を遺構検出面としているが、今回の調査区ではこれらの層に対応するIIIa層からIIIc層を含むIII層に堆積時ないしはその後の沼澤化した時期のものと思われる起伏が認められ、後世の耕作等の影響も受け不安定であったためIVa層上面を主たる検出面とした。ただし、A区南東端は深い澗れ谷にあたり、中央部のIVa層上面から水平に表土を除去し、検出面とし、A区南西部ではIIIb層を面的に捉えることができたため、IIIb層上面で遺構の検出、精査、実測を実施し、その後IV層上面まで掘削して遺構の検出、精査を行い、全体が面的に描いた段階で最終的な実測と空中写真撮影を実施した。

## 第2節 遺構

今回の調査で検出した遺構は、古墳時代後半の溝状遺構9条、中世初頭の掘立柱建物跡10棟、柵列跡・塀跡5条、溝6条、井戸4基、近世以降の溝5条、時期不明の溝5条であり、中世初頭の遺構が主体をなすため中世とそれ以外の時代の遺構に分けて詳述する。

### 1 中世

#### 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡はA区から検出した。現地調査では前述したように遺物の出土した柱穴にのみ遺構番号を付した。掘立柱建物跡については作成した割付け図を合成し、現地で柱穴の組合せ作業を実施し、さらに整理時に柱穴の組合せ作業を行い今回の報告に至った。掘立柱建物跡の規模については第5図を参照されたい。なお、整理作業時に遺物の出土していない柱穴についても続き番号を付し、今回の調査により検出した全ての柱穴について番号を付した。個々の柱穴の規模等については第1表を参照されたい。

##### SB001（第5・6図）

A区西端、5C-49グリッドから5D-40グリッドで検出した掘立柱建物跡である。西桁柱列に方形3連の柱穴SH020、SH103、SH017・109が直線的に認められることから推定したものであり、東桁柱列は柱筋の通りが悪いがSH117、SH192、SH146を考えたい。本掘立柱建物は上面調査時から推定されたものであり、整理時に南東や北西へ展開し更に規模の大きな掘立柱建物跡となる可能性も想定したが、本報告が最も適切と思われ、桁方位N-33°-Eとする梁行1間×桁行2間の南北棟とした。

後述するSB002、SB003をそれぞれ二本柱門、四脚門と想定するならばSB001も四脚門である可能性があり、この場合は桁行1間×梁行2間の門となるが、親柱に取り付く遮蔽施設を明確にできないためその可能性を挙げるにとどめたい。

##### SB002（第5・6図）

SB001と重なるように5C-49グリッドから5D-72グリッドで検出した掘立柱建物跡である。北西側に方形3連の柱穴SH021、SH102、南東側はSH024、SH006が対比される。柱間の長い北東-南西方向を桁柱列と捉え、桁方位N-59°-Eとする梁行1間×桁行1間の東西棟とした。SB001同様、上面調査時から推定されたものである。前述のように二本柱門の可能性も考えられる。



第4図 柱穴実測風景

#### SB003（第5・6図）

SB001の北西、5C-27~49グリッドで検出した掘立柱建物跡である。西桁柱列に北からSH137、SH083、SH090、東桁柱列にSH008、SH015、SH097を充て、桁方位N-0°とする梁行1間×桁行2間の南北棟を推定した。SB001で述べたように四脚門の可能性も考えられる。

#### SB004（第5～7図）

SB002の南東、5D-70~95グリッドで検出した掘立柱建物跡である。東端梁柱列はSH289、SH302、SH310、SH070、次列がSH202、SH038、SH040、SH002、次列は北側の列びを欠き、SH211、SH217、SH223を充て、東側が間の狭い田字状の柱の列びに狭い部分だけ北に広がる。この部分のみの建物とするには柱穴も大きく、整然としているので西側への展開を想定し、SH211の対にSH213、SH202の対にSH203を想定したい。西側が調査区外へと延びるため確証を得ないが、桁方位N-80°-Eとする梁行2間×桁行4間以上の身舎に東側、北側、西側（あくまでも推定の域を出ないが）に廊を持つ、3面廊（平+両妻側）の東西棟としたい。なお、SH033・064、SH036は孫廊の可能性も考えられる。

#### SB005（第5～7図）

SB004の南東、6D-05~28グリッドで検出した掘立柱建物跡である。北桁柱列がSH324、SH326、SH123、東梁柱列がSH123、SH329とし、桁方位N-90°-Eとする梁行2間以上×桁行き3間以上の東西棟としたい。SH324、SH326が方形で大型の柱掘形に溝ないしは段を有することから単なる柱穴以上の建物構造上の用をなす柱穴、例えば入口等の施設であった可能性が考えられ、比較的大型の掘立柱建物であったと思われるが、建物の北東隅を検出したのみであるから推定の域を出ない。また、側柱列の間に見られるSH125、SH041、SH330は小型の柱穴であり、足場柱穴や壁構造の柱穴である間柱の可能性がある。

#### SB006（第5～7図）

SE001の南東、5D-04~49グリッドで検出した掘立柱建物跡である。東桁柱列はSH245、SH256、SH076、SH275の大型の柱穴を描える。東への展開も考えられるが柱穴が希薄になるため西側に展開し、北梁柱列にSH245、SH243、SH058、SH052を充てる。西桁柱列は著しく不揃いとなるが、SH052から南へSH054、SH265、SH273と充てて南西隅柱穴を欠く。南梁はSH275の列びでSH077を充てるが北梁間3間に對し南梁間2間と変則的な建物となる。東桁列の外側SH247、SH258、SH276を東廊、SH059、SH242、SH051を北廊、SH163、SH047、SH261を西側北半廊と捉え、桁方位N-20°-Wとする梁行3間（南梁2間）×桁行4間の身舎に東西と北側に廊を持つ、3面廊（両平+妻側）の南北棟としたい。なお、身舎桁の中軸線上に見られるSH269、SH268は間仕切り柱の可能性があり、SH243、SH058と対応させることにより、北半部を高床の空間とする可能性も考えたい。

#### SB007（第5～7図）

SB006の西、5D-03~46グリッドで検出した掘立柱建物跡である。北東桁柱列はSH048、SH171、SH172、SH251、SH252、SH060を充て、南西隅柱SH177、南東隅柱SH279とし、SH178、SH187を南西桁柱の一部とする。北西妻柱を欠くが桁方位N-71°-Wの2間×5間の東西棟としたい。なお、SH170、SH050は間仕切り柱の可能性が考えられる。

#### SB008（第5・8図）

SB006の南東、5D-78から5E-90グリッドで検出した掘立柱建物跡である。北東桁柱列はSH075、SH069、SH351、やや間を開けSH317を充て、南西桁柱列にSH304、SH315、間を開けSH328を充てる。桁方位N-

22° - Wとする梁行1間×桁行3間（一部広く開く）の変則的な南北棟を想定したい。

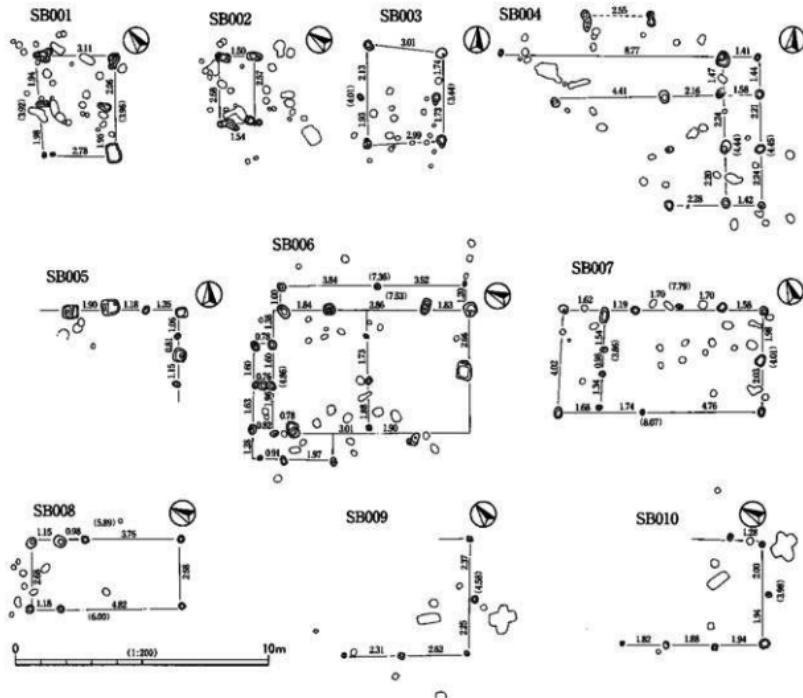
なお、SB006と棟が描うたため、SB006との関連も考えたい。

#### SB009（第5・8図）

SB006の東、5E - 22~25グリッドで検出した掘立柱建物跡である。後述するSB010と重複するSH346を南西隅柱として、SH337、SH332と北西に続きSD002により切られる南西柱穴列と、SH339、SH334と北東に続き調査区外となる南東柱穴列により構成される。僅かな差異であるが、北東へ延びる柱列の柱通りが悪く、SH339がやや外に出る点から南東列を梁行、柱通りの良い南西列を桁行と捉え、桁方位N - 50° - Wとする梁行2間ないしは2間以上×桁行2間以上の東西棟としたい。

#### SB010（第5・8図）

SB009と重なるように5E - 12~34グリッドで検出した掘立柱建物跡である。SH331、SH333、SH336、SH345を西桁柱列、SH338、SH340を東桁柱列とし、SB010と重複するが、SH346を南梁の中央、棟持ち柱とする。桁方位N - 20° - Wとする梁行2間×桁行3間以上の北側を欠く南北棟を想定したい。



第5図 掘立柱建物跡計測図

## 構列跡・堀跡

構列跡・堀跡についても掘立柱建物跡と同様に現地では個別の柱穴として取り扱い、整理時に構列としての番号を付した。個々の柱穴規模等については掘立柱建物跡同様第1表を参照されたい。

### SA001 (第6・7図)

SB001の北東、5D-32~55グリッドで検出した直線的な柱穴列である。北西から南東へSH181、SH185、SH188、SH189、SH281、SH282と互い違いに方形を基調とした柱穴が配される。柱穴列の方位はN-59°-Wである。柱穴が互い違いに配され、横板を両側から押さえるような構造を想定すれば堀跡の可能性が考えられる。

### SA002 (第6図)

調査区北西端、5C-07から4D-81グリッド、SD001a内を中心に検出した直線的な柱穴列である。南西から北東へSH132、SH126、SH127、SH042、SH150、SE001の北縁に見られるSH153、SH019、SH148、SH149と連続し、調査区外へと延びる。SH042とSH150に屈曲が認められるが、柱穴列の方向は概ねN-62°-Eである。

### SA003 (第7図)

SB004の南東、5D-86~6D-05グリッドで検出した逆L字状の柱穴列である。北からSH312、SH124で西に直角に屈曲し、SH003と続く。南北柱穴列の方位はN-10°-Wであり、SB004の南東角に造られた目隠し塀と考えたい。

### SA004 (第6図)

SB006の北、4D-93~96グリッドで検出した直線的な柱穴列である。西からSH155、SH157、SH231、SH234、SH235と連続する。柱穴列の方位はN-78°-Eであり、SB006北側の目隠し塀と考えたい。

### SA005 (第7図)

SB006の南東、5D-39から5E-30グリッドで検出した直線的な柱穴列である。西からSH277、SH278、SH335と連続し、SD002に切られた可能性も考えられる。柱穴列の方位はN-78°-Eで、SB006の南妻の東側延長線上に位置することから、SB006に付随する目隠し塀と捉えたい。

## 溝

### SD006 (第3図)

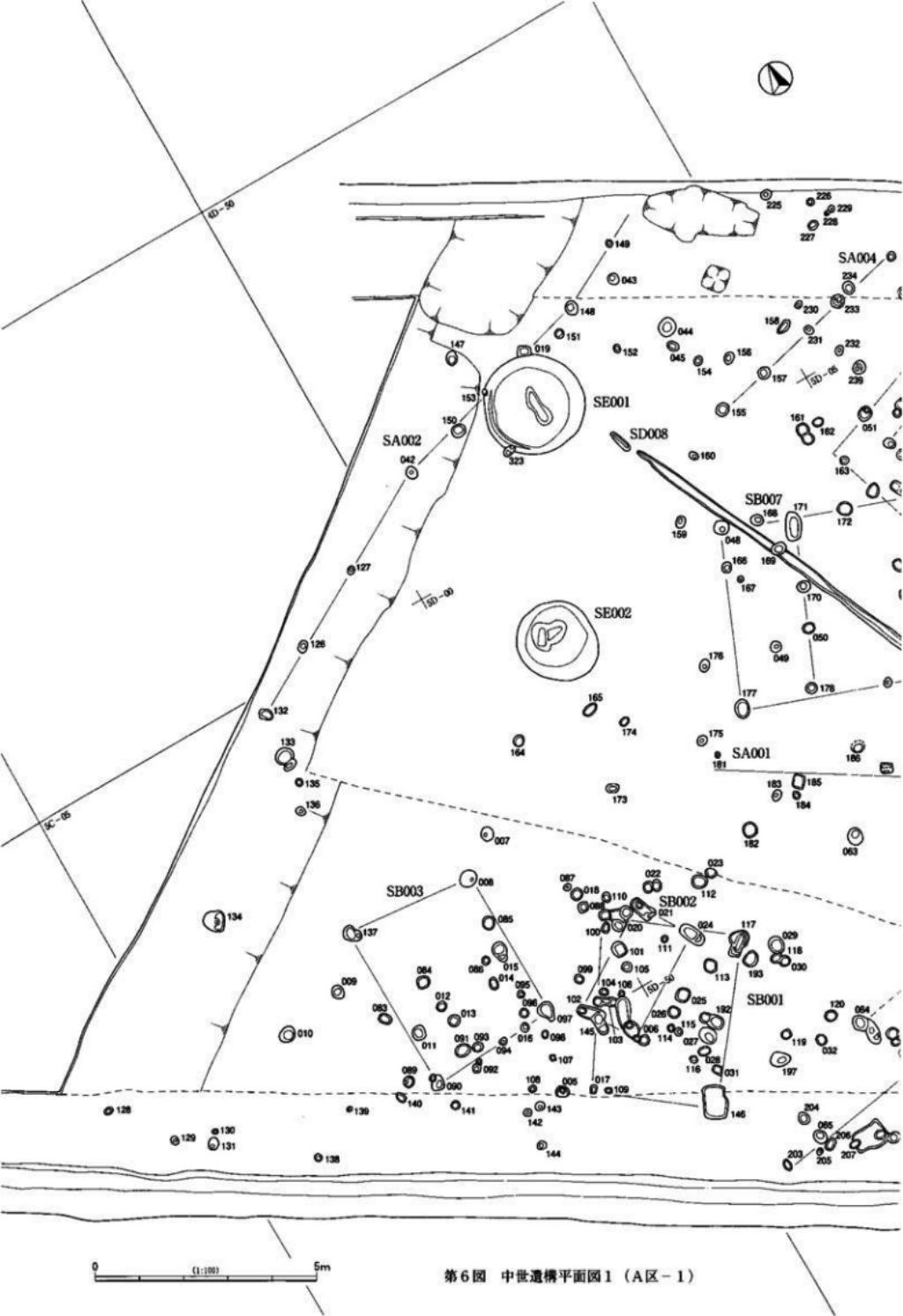
9トレンチ北東端で検出された溝である。遺構の分布が粗く、遺物も少量であったため本調査の対象とせず、確認調査で終了した。溝の方位は概ねN-72°-Eであり、SD008やSD016と区画を構成していた可能性が考えられる。溝の底面は標高33.31m、東側がトレンチ内で緩やかに上がり消滅することから東から西へ水が流れたものと判断される。

遺物は土師質土器小皿（第16図15）が出土した。

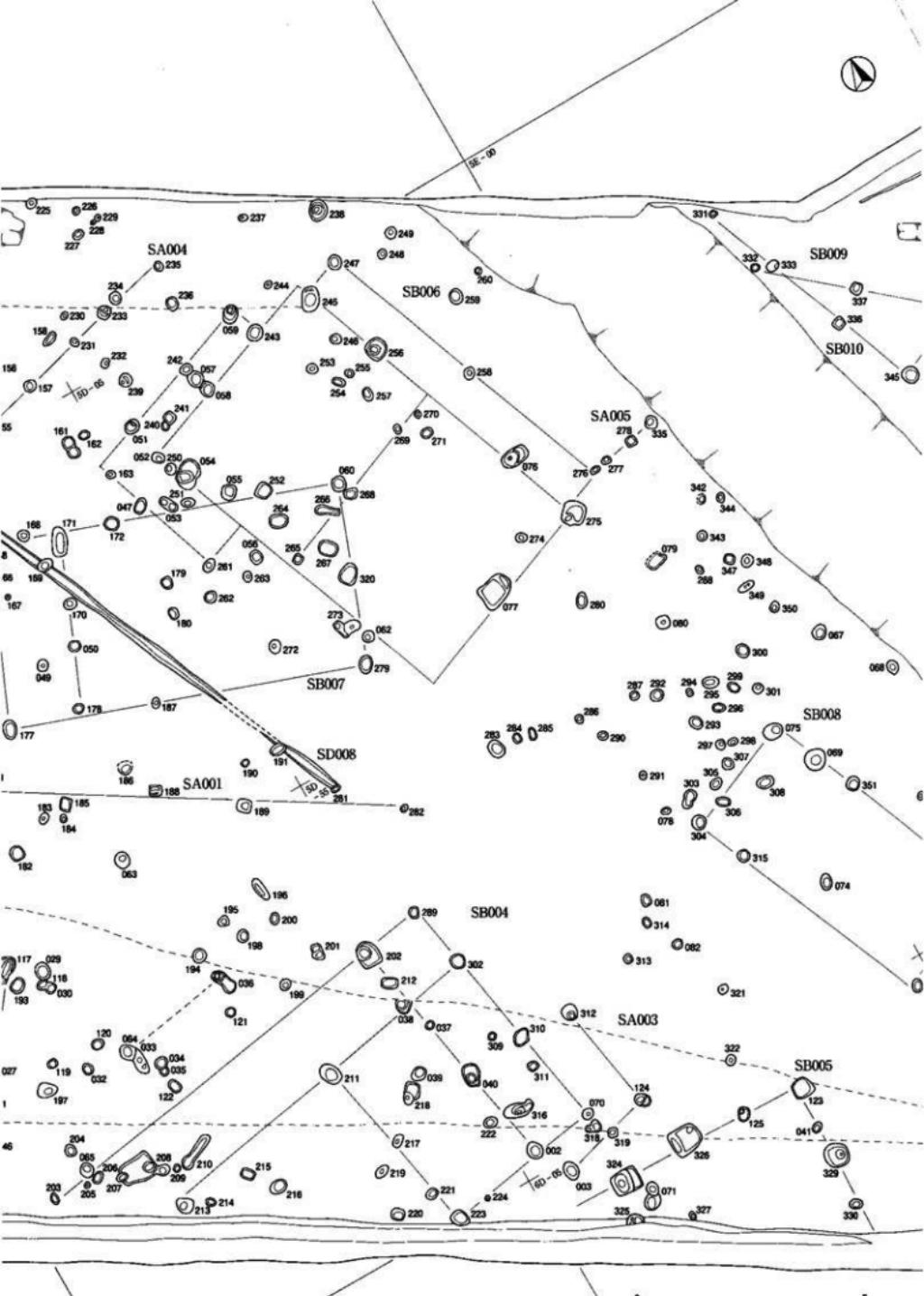
### SD008 (第6・7図)

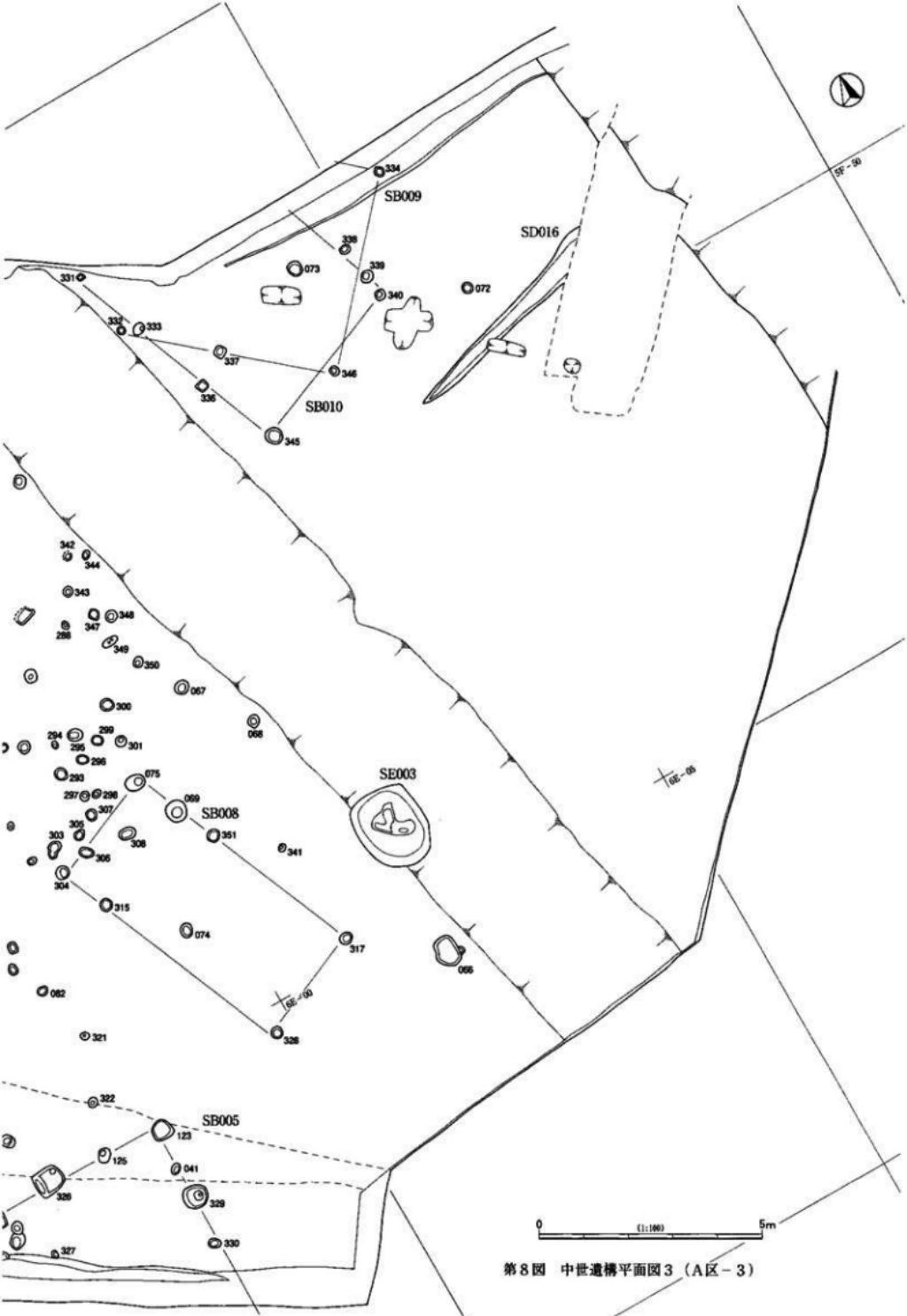
A区北半中央、4D-92グリッドから5D-55グリッドまで直線的に検出した細い溝である。溝の方位N-24°-WとSB006掘立柱建物跡の南西に位置するため、区画溝の可能性が高い。両端は消滅するが、底面標高が北西端で33.90m、南東端で34.02mと僅かに北西に低く、溝の北西端の約1m先にSE001井戸が位置することから、南東から北西の井戸に向かい水が流れたものと判断される。

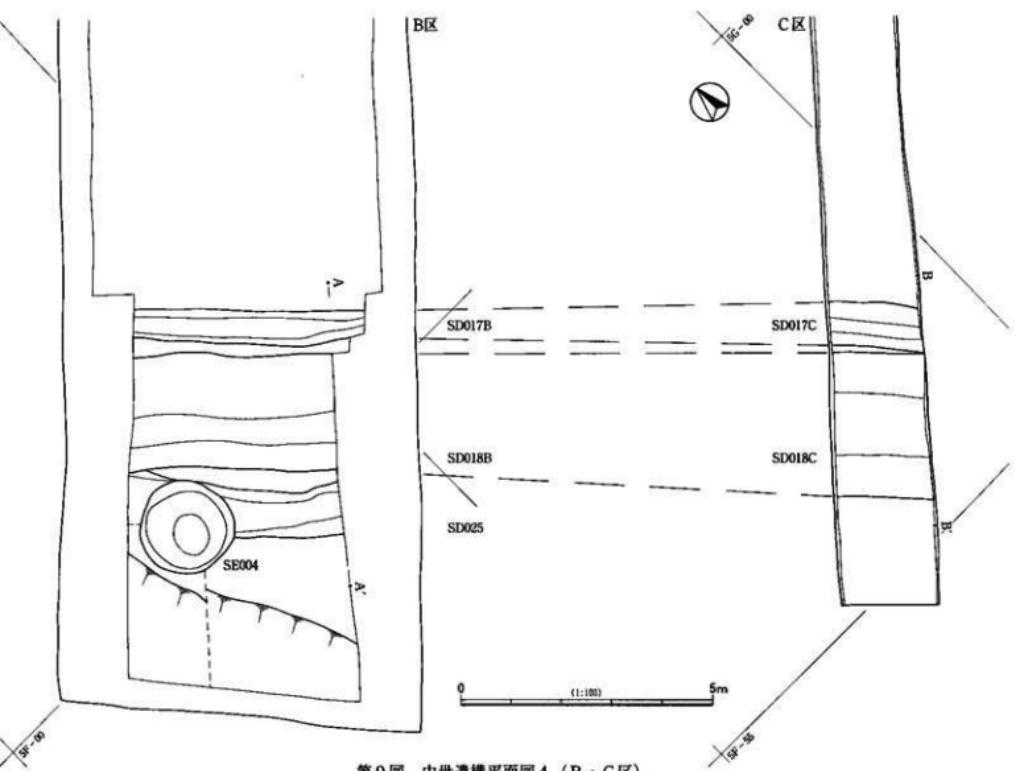
遺物は出土していない。



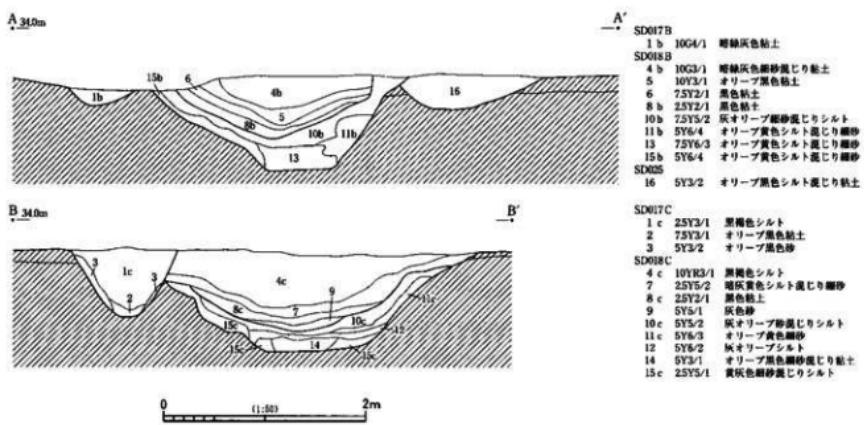
第6図 中世遺構平面図1 (A区-1)







第9図 中世遺構平面図4 (B・C区)



第10図 中世溝状遺構断面図

#### SD016（第8図）

A区東端、5D-44~47グリッドまで直線的に検出した溝である。溝の東端は4トレンチの掘削により消失したが、SD005に切られるまで連続していたのである。溝の方位はN-75°-EでSD008とはほぼ直交することから、区画溝の可能性が考えられ、西側が緩やかに上がり消滅することから西から東へ水が流れたものと判断される。

図示可能な遺物は出土していない。

#### SD017B・017C（第9・10図、図版6・7）

SD017BはB区南西半、4F-73~95グリッドで検出され、SD017CはC区南西半、5F-28~39グリッドで検出された。現道を挟み連続する溝と捉え表記の遺構番号とした。溝はN-44°-W方向に直線的に検出され、後述するSD018B・018Cの北東側に平行して走る。C区南東壁断面の観察ではSD018溝を切っており、SD018B・SD018C溝より新しい。

遺物はC区SD017Cから土師質土器小皿・杯（第16図16~23）などが出土している。

#### SD018B・018C（第9・10図、図版6・7）

SD018BはB区南西半、4F-82グリッドから5F-04グリッドで検出され、SD018CはC区南西半、5F-38~49グリッドで検出された。SD017B・017Cと同様に現道を挟み連続する溝と捉え表記の遺構番号とした。溝はN-46°-W方向に直線的に検出された。前述のようにC区南東壁断面ではSD017Cに切られ、B区南東壁断面では後述するSD025を切る。覆土から底面と10層上面の2時期の使用が想定される。

遺物は土師質土器小皿・杯（第17図24~67）が多量に出土し、B区SD018Bでは検出面付近で渥美窯の胴部片（第20図141~143）が出土した。また、確認調査時に7トレンチから出土した土師質土器はSD018Cに帰属する遺物である可能性が高く、出土状況を明らかにした上で本遺構出土遺物に含めた。

#### SD025（第9・10図、図版6・7）

B区南西端、4F-82グリッドから5F-04グリッドで検出された浅い溝である。前述した中世区画溝SD017B・017C、SD018B・018Cの南西側をほぼ平行して走っており、同様の性格が考えられる。C区で検出されていない点は、SD018Cの開削により消滅したか、もしくは耕作などにより削平された可能性が考えられる。

#### 井戸

##### SE001（第11図、図版4）

A区北端、4D-81~92グリッドで検出した井戸である。径2.21m~2.27mを測る円形を呈し、検出面から底面までの深さ1.14mを測る箱形の断面形態である。底面中央に南北の溝状の落込みが見られ水溜と考えられる。水溜は底面からの深さ約0.13m、検出面からの深さ1.27mを測る。焼土層が上位と下位に見られる。焼土直下に灰層が認められることから焼土の2次的な廃棄ではなく井戸内で焼かれたものと判断され、廃棄物等が焼却されたものであろう。

遺物は同安窯系青磁皿I-2類<sup>2)</sup>（第20図147）、龍泉窯系青磁碗I-4類と思われる破片（第20図148）が出土し、他に土師質土器小皿・杯（第18図68~111）、鉄釘（第23図3）が出土している。また、図示しなかったが粘土塊が出土しており、建物の壁材の可能性も考えられる。

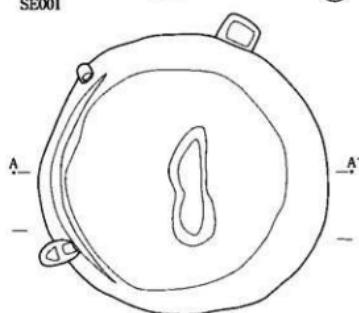
##### SE002（第12図、図版4）

A区北西、SE001の南西、5D-00~11グリッドで検出した井戸である。長軸1.87m~短軸1.74mの卵形を

SE001

+40-82

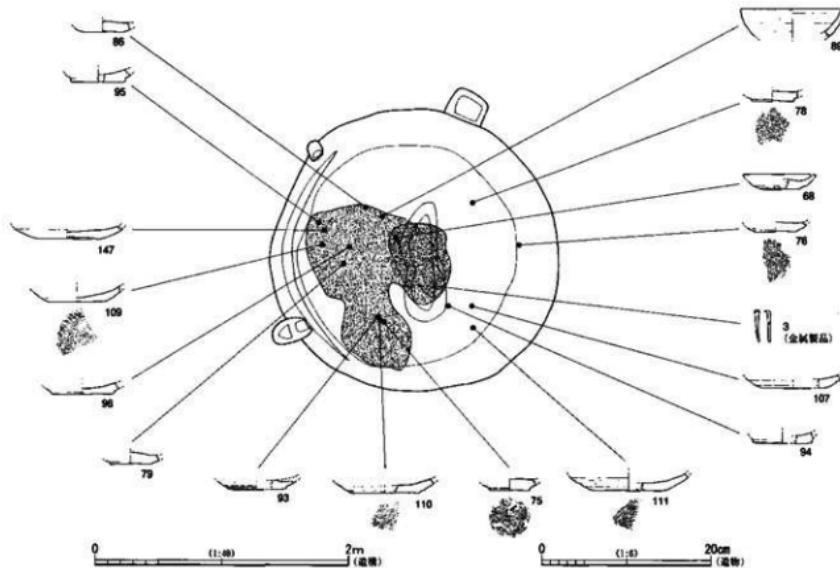
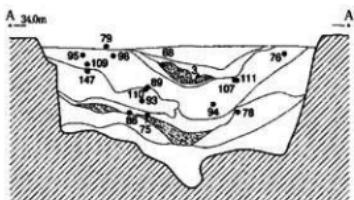
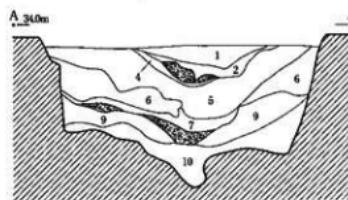
Ⓐ



3 上部焼土層

8 下部焼土層

- 1 IOYR3/1 黒褐色シルト V層ブロック・炭化物粒・焼七乾を含む  
 2 7SYRS/1 開灰褐色粘土 灰層  
 3 SYRS/4 明赤多色粘土 混土層  
 4 7SYR2/1 黒褐色シルト 混土ブロックをわずかに含む  
 5 IOYR2/1 黒褐色シルト 炭化物粒・燒土粒・土器断片を含む  
 6 IOYR3/3 黑褐色シルト IOYR5/2灰黒褐色シルトブロックを含む  
 7 7SYR5/1 開灰褐色粘土 灰層  
 8 SYR5/2 明赤多色粘土 烧土層、灰層を含む  
 9 IOYR4/2 灰黒褐色粘土 黑褐色シルト V層ブロックを多量に含む  
 10 SY2/1 黒色粘土 黑褐色シルトブロック・V層ブロックを含む



第11図 中世井戸1 (SE001)

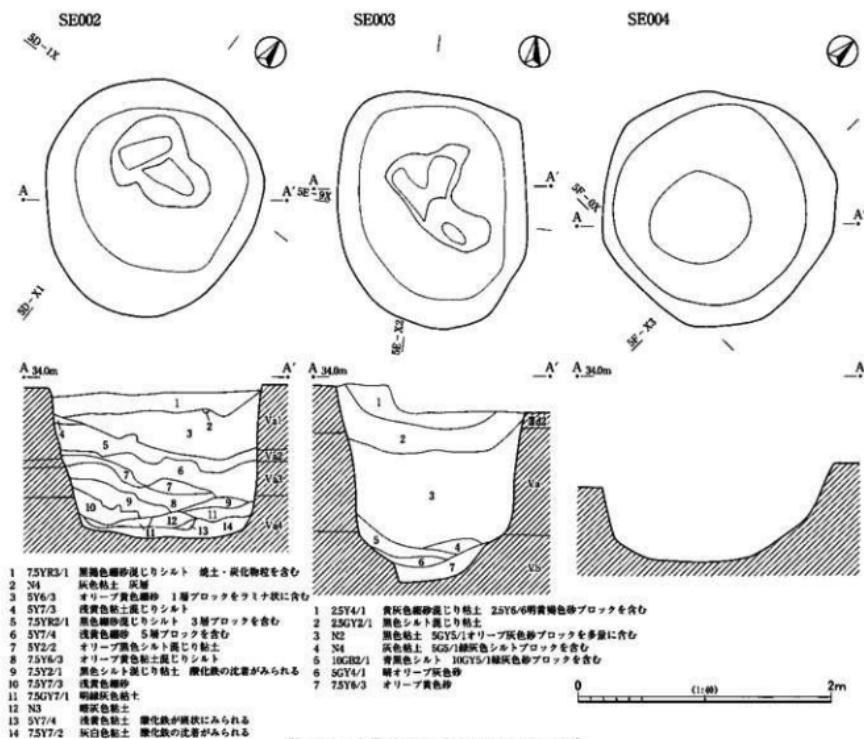
呈し、検出面からの深さ1.22mを測る箱形の断面形態である。底面北半が僅かに低くなってしまい、水溜の可能性が考えられる。水溜は底面からの深さ約0.23m、検出面からの深さ1.45mを測る。覆土は全体的に基盤層下部層を主体とする浅黄色シルト層と基盤層上部層や表土層を含む黒色シルト層が細かな互層を呈している。他の井戸に比較して出土遺物が少ない点や土層の相違から丁寧に埋め戻された可能性が考えられる。

遺物は常滑窯の胴部片（第20図140）が出土し、SB006の北廻の北東隅柱SH059から出土した破片と接合した。その他に土師質土器小皿・杯（第19図112～117）が少量と白磁四（三）耳壺耳部片（第20図149）が出土している。

### SE003（第12図、図版5）

A区南東部、5E-81～92グリッドで検出した井戸である。長軸1.86m～短軸1.51mの隅丸長方形を呈し、検出面からの深さ1.54mを測り、底面が緩やかに弯曲する断面形態である。中央部にY字状の落込みが見られ水溜と考えられる。水溜は底面からの深さ0.16m、検出面からの深さ1.70mを測る。覆土は中位に黒色粘土層が厚く堆積し、SE002とは異なるが一気に埋め戻された可能性が考えられる。

遺物は土師質土器小皿・杯（第19図118～130）が主体をなしている。



第12図 中世井戸2 (SE002・003・004)

#### SE004（第12図、図版5）

B区南西端、4F-92グリッドから5F-03グリッドで検出した井戸である。径1.84m～1.87mを測る円形を呈し、検出面から深さ0.73mを測る。底面は緩やかに湾曲する椀形の断面形態を呈している。井戸の北東端はSD025溝の北東壁から掘り込まれており、断面観察からSD025溝と併存していた可能性が高い。

遺物は土師質土器小皿（第19図131・132）が2点出土したのみである。

#### 2 その他の時代（第13図～15図、図版2・3・7）

その他の時代とした遺構は溝状遺構19条であり、古墳時代後半9条、近世以降5条、時期不詳のもの5条に大別される。古墳時代後半のものはA区SD007・009・011・012・013・014・015、C区SD022・023である。近世以降のものと時期不詳のものは詳述しないが、近世以降のものはA区SD001a・001b・002、C区と9トレンチで検出したSD003、11トレンチで検出したSD004、A区とB区の間のSD005である。時期不詳のものはB区SD010、C区SD019・020・021・024である。

##### 古墳時代後半の溝

SD007はA区、5C-33グリッドから5E-24グリッドまで調査区をほぼ東西に横切るように検出された溝である。溝は3回以上場所を僅かにずらして掘られているが、同時期、同目的で掘られたものと判断し、一括して遺構番号を付した。5D-32グリッドを境に西半部は2条～3条の溝が平行し、東半部は複雑に重なる。また、東半部が深く最も深い5E-32グリッド付近では検出面からの深さ0.72mを測る。

SD009はA区中央、5D-26～47グリッドで検出された溝である。溝の方位を概ねN-35°-Wにとり、緩やかに北東に弧を描く。床面は南東から北西に向かい低くなっている。

SD011はA区北東部、5D-19～27グリッドで検出された溝であり、溝の方位をN-61°-Eにとる直線的な溝である。溝の北東端はSD002で切られ、SD002の先は調査区外となるためその先は不明である。

SD012はA区南東部、5D-67グリッドから5E-90グリッドで検出された溝であり、北半部で一旦切れるが連続する溝として判断した。溝は北端ではN-0°、南東端N-60°-Wと、北から南に緩やかに弧を描き、南半部は南東に向いている。

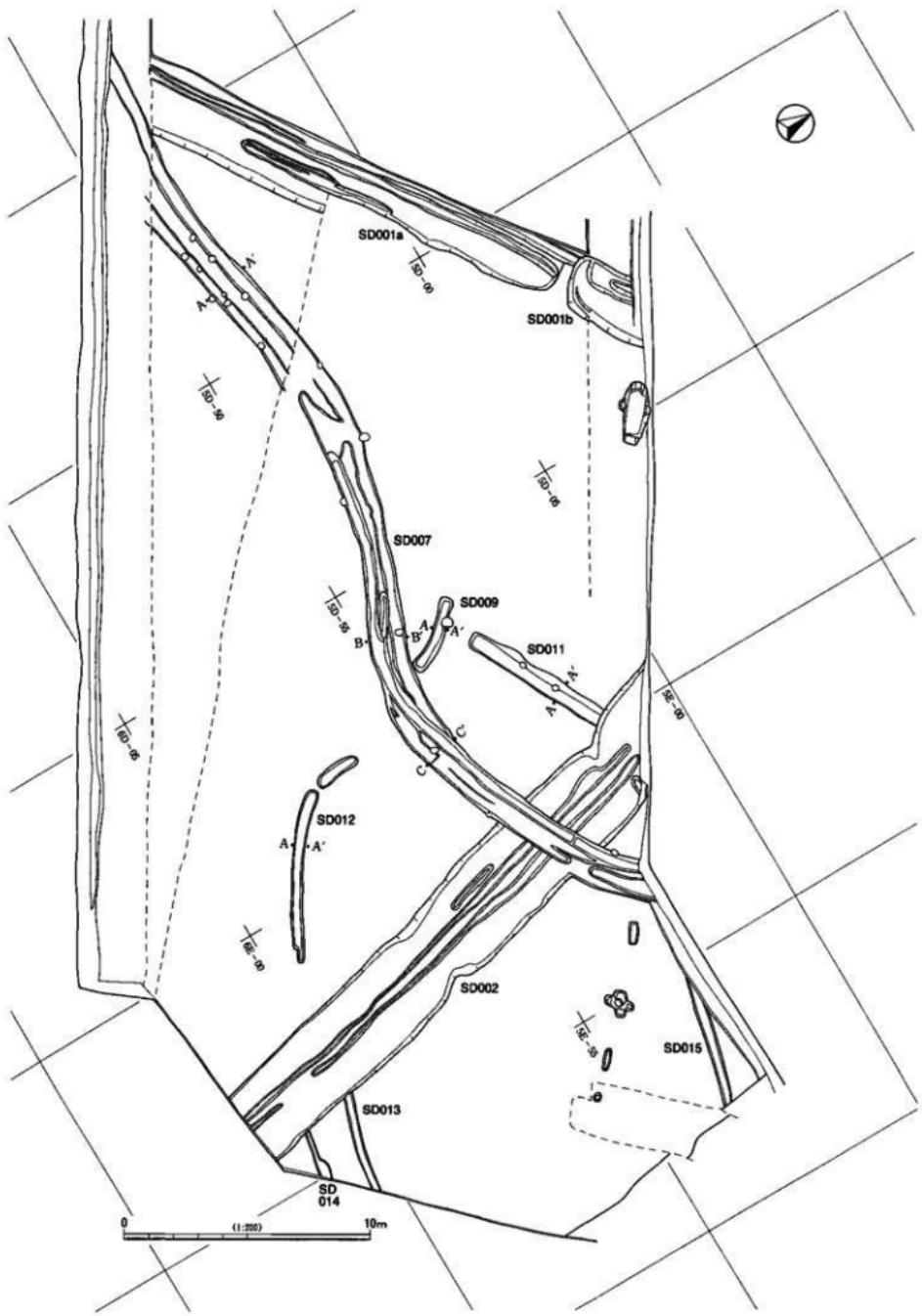
SD013はA区南東端、5E-93グリッドから6E-05グリッドで検出された溝であり、西端はSD002の東壁から始まり、東端は調査区外へと延びる。溝の方位をN-70°-Wにとる直線的な溝であるが、SD012から連続する可能性や平行するSD014との関連も考えられる。

SD014はA区南東端、6E-14グリッドで検出された溝であり、西端はSD002の東壁から始まり、東端は調査区外へと延びる。溝の方位はN-79°-Wと直線的であるが、東半部は広くなつており2条の溝であった可能性もある。

SD015はA区北東端、5E-25～37グリッドで検出された溝であり、西端は調査区外へ、東端はSD004により切られる。溝の方位はN-77°-Wと直線的である。

SD022はC区中央、5G-01グリッドで検出した溝である。幅0.58m、深さ0.26mを測り、溝の方位はN-20°-Wと直線的である。床面は北西から南東に向かって低くなっている。

SD023はC区中央、4G-91グリッドから5G-01グリッドで検出した溝である。幅0.46m、深さ0.29mを測り、溝の方位はN-9°-Wと直線的である。床面はSD022と同様に北西から南東に向かって低くなっている。



第13図 その他の時代造構平面図1 (A区)

SD007

A 345m

A'

B 345m

B'

C 345m

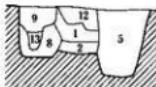
C'



- 1 10YR2/1 黒褐色粘土層じりシルト  
2 10YR4/2 黑褐色色シルトじり細砂  
3 25Y4/1 黄褐色シルトじり細砂  
4 10YR4/1 黄褐色シルトじり粘土  
5 7.5YR4/1 黄褐色シルトじり粘土 V層ブロックを含む  
6 10YR2/1 黑褐色粘土 下部に酸化鉄の沈着がみられる  
7 25Y6/2 黑褐色粘土



- 8 25Y4/1 黑褐色シルトじり細砂  
9 25Y4/2 黑褐色色シルト 25Y2/2 黑褐色粘土層じりシルト・V層ブロックを含む  
10 10YR2/1 黑褐色シルトじり粘土  
11 25Y4/1 黄褐色シルトじり細砂 V層ブロックを含む  
12 7.5YR3/1 黑褐色シルトじり粘土 V層ブロックを少量化  
13 25Y3/1 黑褐色色シルト V層ブロックを多く含む



SD009

A 345m

A'

SD011

A 345m

A'

SD012

A 345m

A'



- 1 5Y4/1 黑褐色シルトじり細砂 D

(1:50) 1m

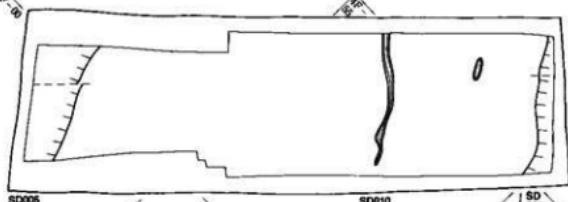


- 1 10YR3/1 黑褐色シルト  
25Y5/2 黑褐色色シルトを多量に含む。



- 1 7.5YR3/1 黑褐色細砂じり粘土  
25YH4/6 赤褐色酸化鉄沈着ブロックを含む。

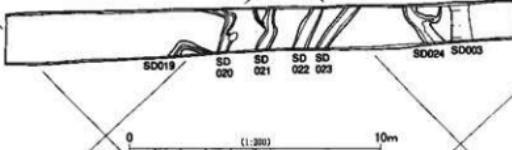
第14図 その他の時代溝状構造断面図



SD005

SD010

SD003



SD019 SD 020 SD 021 SD 022 SD 023 SD 024 SD 003

0 (1:200) 10m

第15図 その他の時代遺構平面図2 (B・C区)

### 第3節 遺物

遺物は土器、土製品、金属製品、石製品に大別し掲載した。

土器については中世とその他の時代に分けて掲載したが、中世後半の土器はその他の時代に含めた。

主体をなす中世の土器はさらに土師質土器、国産陶器、貿易陶磁器の順に掲載し、柱穴 (SH)、溝 (SD)、井戸 (SE)、グリッド・トレンチの順に掲載した。なお、トレンチから出土した遺物の一部で各遺構に帰属する可能性が高い遺物は各遺構に統けて掲載し、溝の遺物であっても該期のものではない溝から出土したものについては、グリッド・トレンチと同様の取扱いとした。

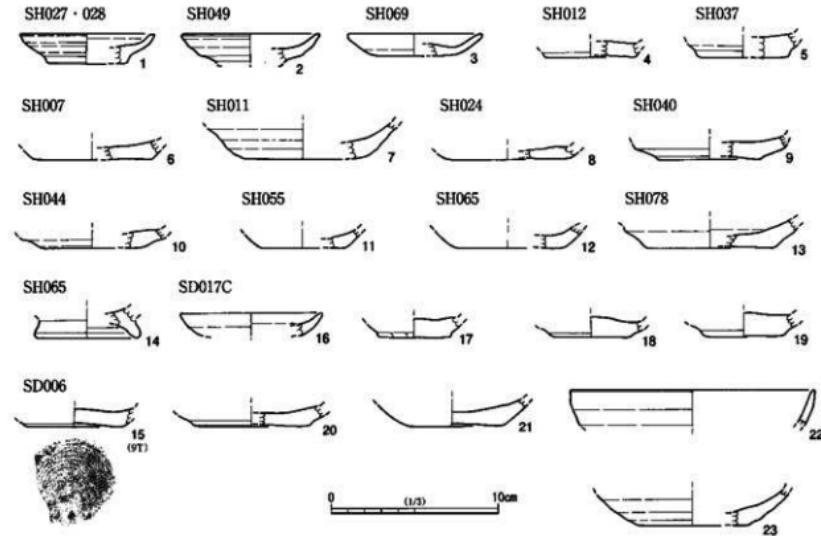
土師質土器については遺存状況も悪く、底部片が主体を成すことから、個別の詳述よりも全体の様相と特徴的な遺物の詳述に紙幅を割き、写真図版もその特徴を捉えるよう努力したつもりである。そのため、各個の計測値、胎土、色調については第3表を参照されたい。

#### 1 土器

中世（第16～20図、巻頭図版、図版8～10）

第16図1～第19図139は土師質土器である。小皿、杯、器台などの器種が見られる。814点、4,161g、実測・掲載点数139点の内、完形のものは皆無であり、口縁部から底部まで遺存し全体の形状が復元できたものも数点しかない。

小皿は厚めの底部から僅かな体部、口縁部へと続くもので体部下半が屈曲して起ち上がるものは小皿にした。また、底部内面が平坦なものと底部内面見込み部分が窪むものがあり、小皿の特徴として捉えた。杯は体部下半が緩やかに屈曲して起ち上がるものを杯とし、底部内面中央が窪み断面が緩やかな弧を描いて体部内面へ続くものについては杯の特徴として捉えた。



第16図 中世土器1（土師質土器1）

第16図1～14は柱穴内から出土した土師質土器である。1～5が小皿、6～13が杯である。1はSH027・028内から出土し、接合した。底部壁が高台状に厚く、体部壁もやや厚く短い。2はSH049から出土しており、1に似るが口縁端部はやや丸みを帯びる。3は内面中央が膨らみ、底部外面が扁平なものである。14は高台輪の底部片である。時期的には古くなる可能性が高い。

第16図15～第17図67は溝内から出土した土師質土器である。15は9トレンチ内で検出したSD006の上層から出土し、やや大振りではあるが小皿の底部と思われる。外面に回転糸切り痕が認められた。

第16図16～23はC区SD017Cから出土した土師質土器である。16～19が小皿、20～23が杯である。16は小皿口縁部で断面三角形を呈する。22はロクロ目がやや粗い杯の口縁部片である。端部は上方にのびて終息する。23は同様にロクロ目がやや粗い杯の底部片である。

第17図24～67はすべて区画溝と判断されるSD018から出土した土師質土器である。B区出土の遺物と、C区出土の遺物に分け、それぞれ小皿、杯の順に掲載した。なお、7トレンチ調査中に出土した遺物はC区SD018Cの遺物の可能性が高く、ここに採り上げた。

第17図24～37はB区SD018Bから出土した土師質土器である。24～33が小皿、34～37が杯である。小皿は柱状高台風に作られているが、28・31では底部からそのまま体部へと続く部分もある。32はやや特殊で底部からそのまま体部へと続く、体部の器壁が薄いため小皿とした。底部内面中央が高くなるがロクロ目のほかに指頭痕も認められる。

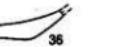
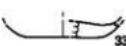
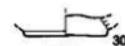
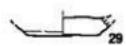
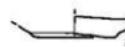
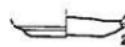
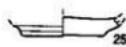
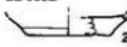
第17図38～67はC区SD018Cから出土した土師質土器である。38～56が小皿、57～67が杯である。38・39は全体の形態のわかるもので38は低い柱状高台と体部下半の腰が特徴的で、口縁端部は鋭利に仕上げられている。41も同様の口縁部片であろう。39は底部から体部が緩やかに起ち上がり38とは異なる形態をしている。42が同様の口縁部片である可能性が高い。40は小片であるが全体の形態がわかるもので内面では底部と体部の境が認められない。また、柱状高台側縁に手持ちヘラ削りが施される。古い様相であろう。43・44が同様の口縁部片の可能性が高い。56は手づくねの小皿口縁部片と思われ、色調も橙色で他の土器と異質である。搬入品であろう。57は唯一全体の形態のわかる杯で底径の小さい低い柱状高台から体部が斜めに直線的に起ち上がり、上方で内湾し端部がわずかに外湾ぎみになる。体部のロクロ目も細かい。65には底部に養の子痕のようなものが見られる。

第18図68～111はすべてA区北西端で検出したSE001から出土した土師質土器である。68～86が小皿、87～111が杯である。小皿は全体的に柱状高台で腰を持つものが多いが、70～74の口縁部片からは体部の起ち上がりが少ないと見える。78は柱状高台側縁にヘラ削り、内面に同心円状の窪みがみられ他の小皿と異なる。75・76・79は底部に直線的な傷が認められ、打ち欠いた可能性も考えられる。特に79は顕著である。87～89の杯口縁は若干内湾気味でロクロ目も粗い。90はこの時期の杯としては異質であり、古代のロクロ土師器杯の可能性も考えられる。93の杯は柱状高台側縁にヘラ削りを施している。

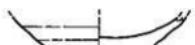
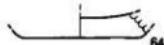
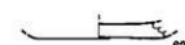
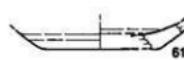
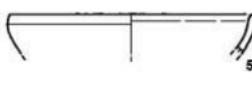
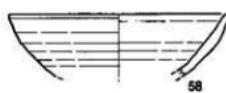
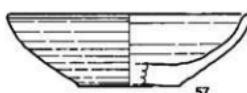
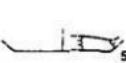
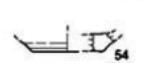
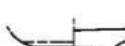
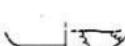
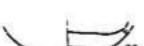
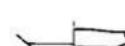
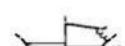
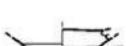
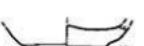
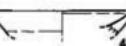
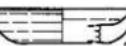
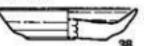
第19図112～117はA区西端SE002から出土した土師質土器である。112～114が小皿、115～116が杯である。114は底部が突出しやや異質な感がある。115も古代のロクロ土師器杯であろうか。

第19図118～130はA区東端SE003から出土した土師質土器である。118～123が小皿、124～128が杯である。小皿は柱状高台に腰を有するものが大半を占めるが、体部の起ち上がりは低そうである。124杯の口縁部片はロクロ目の少ないものであろう。129・130は形態が異なるが脚部である。129は高脚皿、130は高脚輪の脚部であろう。

SD018B

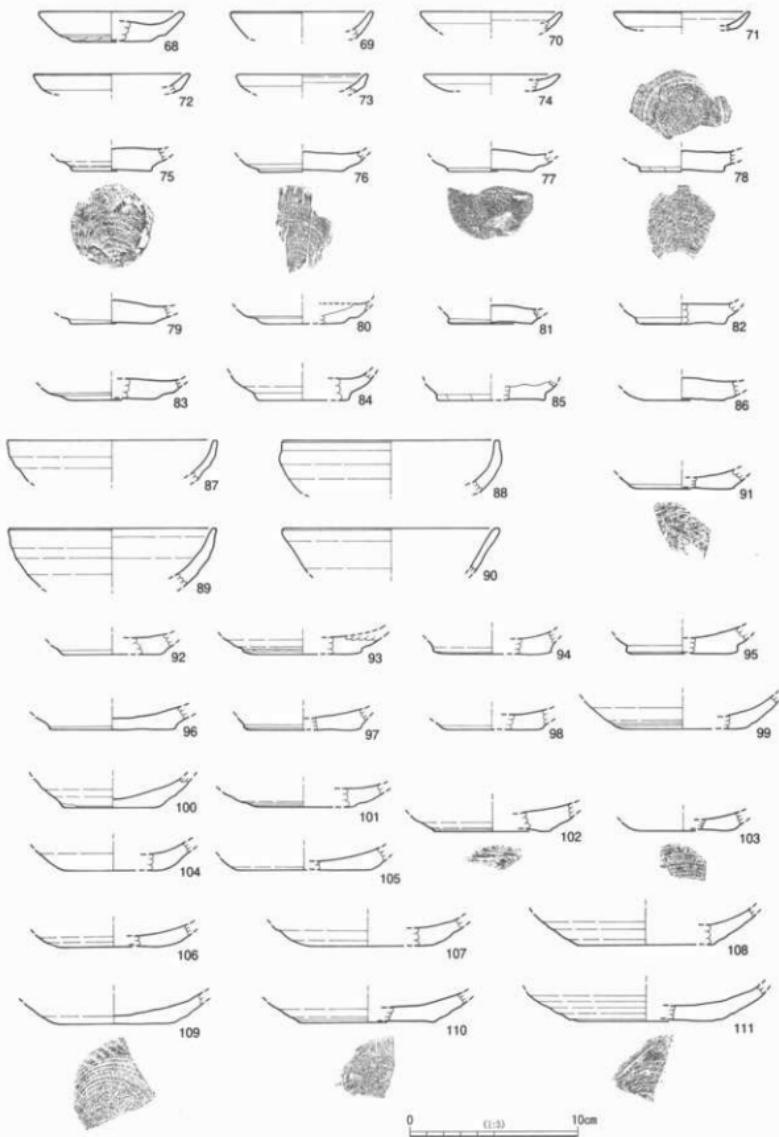


SD018C

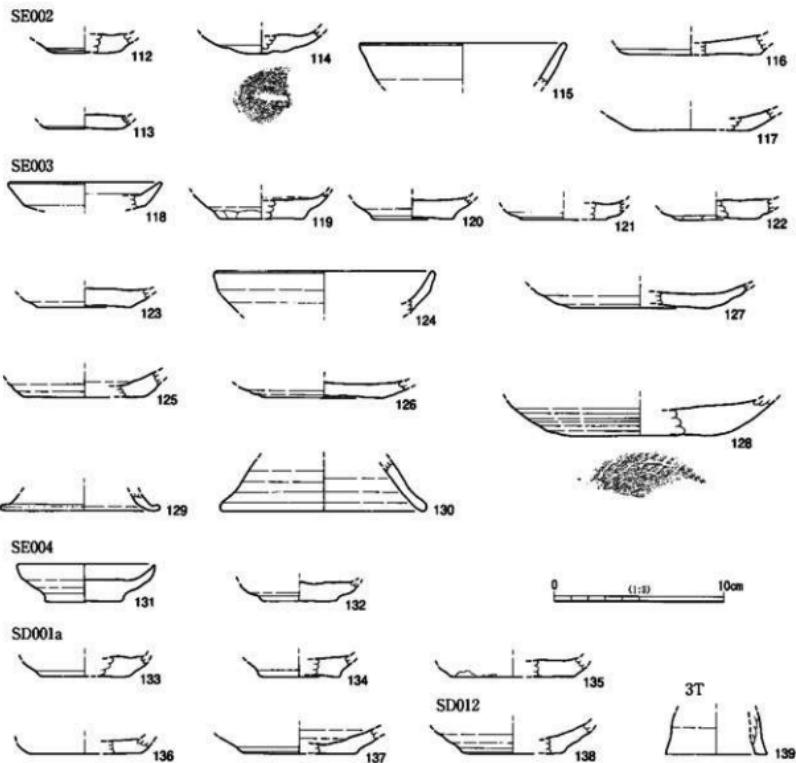


第17図 中世土器2（土師質土器2）

SE001



第18図 中世土器3（土師質土器3）



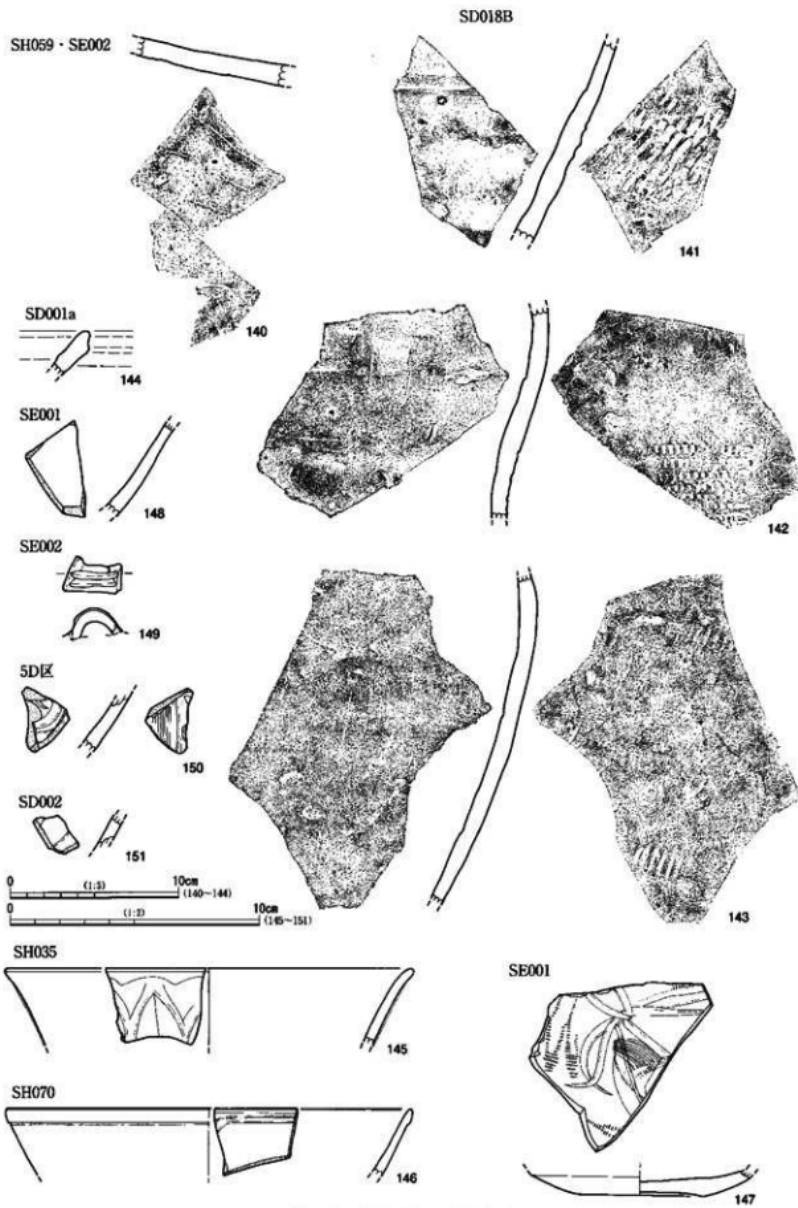
第19図 中世土器4（土師質土器4）

第19図131・132はB区南東端SE004から出土した土師質土器であり、いずれも小皿である。131は径の小さな柱状高台の底部から体部が緩やかに立ち上がり、高い位置に腰を有して鋭利な口縁部へと続いている。

第19図133～139はSD001やトレンチ等の該期の遺構以外から出土した土師質土器である。133～136はSD001から出土したもので133・134が小皿、135～137が杯である。138はSD012から出土した杯である。溝は古墳時代のものと判断され、遺物はこれを切った柱穴のものである可能性が高い。139は3トレンチから出土した脚部片である。疊付がヘラ削りにより平坦に仕上げられており、他に例もなく異質な感がある。

第20図140～144は国产陶器である。

第20図140はSH059柱穴とSE002井戸から出土した破片が接合したもので、常滑窯の胴部片である。141～143はいずれも渥美窯の胴部片である。B区SD018Bから出土した。144はSD001a近世溝から出土した渥



第20図 中世土器5（陶磁器）

美捏鉢の口縁部である。

第20図145～151は貿易陶磁器である。龍泉窯系青磁碗の破片を主体に同安窯系青磁皿などが出土した。

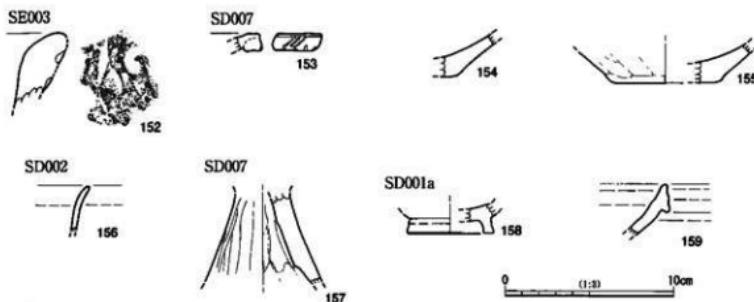
第20図145・146は柱穴内から出土した龍泉窯系青磁碗の破片である。145はSH035から出土したもので外面に片彫りによる鎮蓮弁が見られ、龍泉窯系青磁碗 I - 5・b類<sup>2)</sup>と思われる。146はSH070から出土した龍泉窯系青磁碗である。体部内面に2本の片彫りによる沈線が見られ、龍泉窯系青磁碗 I - 4類と思われる。軸調は次に述べるSE001出土の同安窯系青磁皿に似ており、口縁部が玉縁状を呈する。147はSE001から出土した同安窯系青磁皿 I - 2類である。内面に片彫りと桟状工具による文様が見られる。底部は全面施釉後に釉を搔き落としている。148はSE001から出土した青磁碗体部片である。口縁、底部とともに認められないが遺存部の上端に僅かに片彫りが見られ、146と同様に龍泉窯系青磁碗 I - 4類の可能性が高い。149はSE002から出土した白磁四耳壺の耳部である。2条の沈線が見られ、胴部との接合を強化するために針状の工具で刺突している。150は5D区南半部から出土した青磁碗体部片である。小片であるが、内面に花文様と思われる片彫り、外面に縱方向の櫛目を施した蓮弁が彫り出される。龍泉窯系青磁碗 I - 6類と思われる。151はSD002から出土した青磁碗体部片で内面に花文様と思われる片彫りが施される。龍泉窯系青磁碗 I - 2類と思われる。

#### その他の時代（第21図、図版10）

第21図152は繩文土器の口縁部片である。口唇部は外反し波状口縁を呈する深鉢と思われる。太めの沈線により渦巻き紋が施されることから中期加曾利E式土器の可能性が高い。

第21図153～156は弥生時代後期から古墳時代前期初頭の土器である。156を除きSD007から出土した。153は壺の口縁部片で有段口縁の口唇部にLRの斜縄文を施し、口唇部下端に同原体の押圧によるきざみ目を有する。154は壺の底部片、155は壺ないしは壺の底部片、156は鉢の口縁部片でいずれも粗砂粒を多く含む胎土が特徴的である。157はSD007から出土した土師器高杯脚部片である。外面は縱方向のヘラミガキ、内面は指頭による整形痕が顕著である。古墳時代中期後葉のものであろう。

第21図158・159はSD001aから出土した中世後期国産陶器である。158は瀬戸美濃天目茶碗の底部片、159は瀬戸美濃播鉢の口縁部片である。



第21図 その他の時代の土器

## 2 土製品（第22図、図版10）

該当する遺物としては、土錘2点、転用砥石1点、羽口片1点、粘土塊である。羽口片は小片であり図示していない。粘土塊はSE001から出土したものが主体を成すが図示していない。

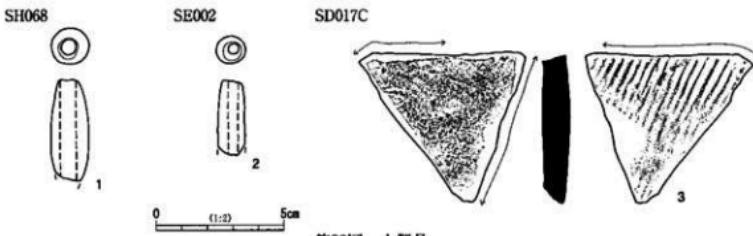
第22図1はSH068柱穴から出土した管状土錘である。片側を欠損しているがその形状から8割～9割は遺存しているものと思われる。残存長4.0cm、最大径1.5cm、孔径0.6cm、残存重量5.47gである。2はSE002井戸から出土した管状土錘で、1に比して小型である。同様に片側を欠損しているが、5割～6割は遺存しているものと思われる。孔は偏心して作られており、残存長2.9cm、最大径1.1cm、孔径0.4cm、残存重量2.58gである。

第22図3はB区SD017Cから出土した須恵器壺胴部の破片である。外面に平行叩き目、内面は同心円のアテ具痕が僅かに認められ擦り消されたものであろう。一部に摩滅が認められ転用砥石として使用されたものと判断されることから土製品に含めた。比較的摩滅の著しい部分を上にすると縦5.9cm、横6.6cm、厚さ1.1cm、重量38.11gを測る。

## 3 金属製品（第22図、図版10）

第23図1はSD018B溝内から出土した両闇の刀子である。中ほどから鋒にかけて欠損しており、茎の一部は調査時に消失した。残存長11.2cm、身幅2.4cm、厚さ0.6cm、茎長6.2cm、茎幅は間部で1.6cm、茎厚0.5cmである。闇は刃側約0.3cm、鋒側約0.4cmである。

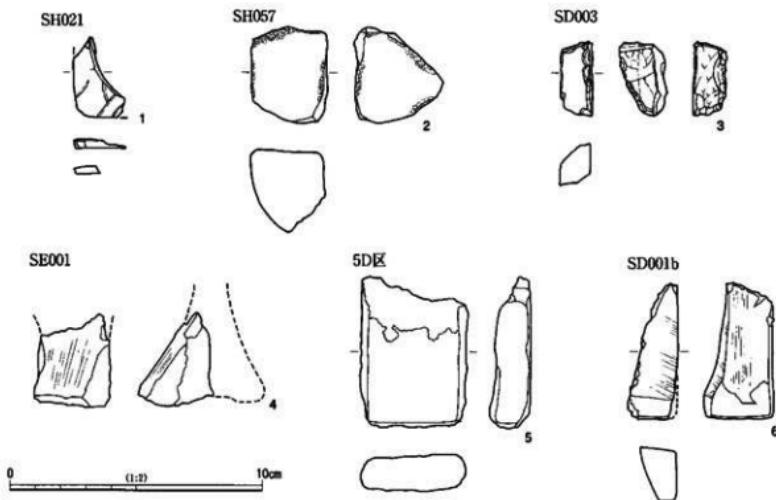
第23図2・3は鉄釘である。2はSH053柱穴内から出土した。両端を欠損しており残存長2.1cmを測る。横断面は上半0.6cm×0.6cmの方形を呈し、下半は面取りにより円形に近い形状を呈する。鉄釘に含めたが、鎌や工具等の一部の可能性もある。3はSE001井戸内から出土し、硬化した粘土に保護されていたため、ほぼ完形である。長さ3.8cm、横断面は先端部で0.2cm×0.2cmの方形、頭部付近で0.5cm×0.3cmの長方形を呈する。頭部は緩く潰して折り曲げられる。



第22図 土製品



第23図 金属製品



第24図 石製品

第23図4は8トレンチ(C区東端、SD003)から出土した鉄炮玉である。径1.20cm、重量10.78gを測り、3匁玉と判断される。球形ではなく、円筒状の両端を丸めた形状を呈し、両端の丸みも上下で異なる。外面はやや緑青色を帯びた灰白色(2.5GY8/1)を呈し、内部は調査時のガジリ痕から灰色(N4/0)である。材質は鉛であろう。

第23図5はSD001aから出土した近世錢貨である。「文久永寶」で「文」は草書体である。外縁外径縦26.5mm・横26.6mm、外縁内径は縦・横ともに21.4mm、内郭外径縦8.8mm・横8.7mm、外郭内径縦6.5mm・横6.8mm、外縁厚1.0mm、内面厚0.7mm、量目3.3gを測る。

#### 4 石製品(第24図、図版10)

第24図1はSH021柱穴から出土した石硯の破片である。L字形の薄片状を呈し、両側面のみが原形をとどめる。石材は黒色の片岩である。L字状の頂部内側に段が認められ、硯の左下隅、周縁に陸の一部が残されたものと考えられる。僅かな破片から推し量れば、現全体は断面逆台形を呈し、四隅は面取りが施されていたと思われる。

第24図2・3は燧石である。石材はいずれも玉髓である。2はSH057柱穴から出土し、3はSD003から出土した。

第24図4～6は砥石である。石材はいずれも流紋岩である。4はSE001中世井戸、5は5D区、6はSD001bから出土した。

注1 松本 勝 1997「平成8年度 千葉県 君津市内遺跡発掘調査報告書」君津市教育委員会  
能城秀喜 1998「平成9年度 千葉県 君津市内遺跡発掘調査報告書」君津市教育委員会

2 貿易陶器の分類及び時期については、横田賢次郎・森田 地 1978「大宰府出土の輸入中國陶磁について－形式分類と編年を中心として－」『九州歴史資料館研究論集』4 九州歴史資料館 にしたがった。













## 第3章 青柳向台遺跡

### 第1節 調査の方法と基本層序

#### 1 調査の方法（第25図）

青柳向台遺跡は新設道路部にあたり、現況で4枚の水田と1か所の山林から成っている。地形としては、南から北にのびる舌状の段丘面で西側は小櫃川の浸食による段丘崖となり、東側は開析谷の緩斜面を棚田状に整地し水田としている。確認調査は全体で20本のトレンチを設定し実施した。トレンチ調査により、調査対象範囲北東部、17～19トレンチで古墳時代後半の溝、13・14トレンチと16～19トレンチで中世以降の溝が確認されたため溝の部分のみを拡張し、発掘調査を実施した。確認調査は溝の拡張範囲を含めて498mについて実施し、確認調査の範囲内で終了した。図面作成にあたっては上新田張山遺跡同様に事業者により設置された用地境界杭（幅杭）を使用し平面図を作成するとともに、用地測量などのために設置された既存の多角点上の標高を使用し断面図等を作成した。

#### 2 基本層序（第25図）

基本層序については、土層柱状図を基に作成し、上新田張山遺跡の成果と突合させた。その成因等は上新田張山遺跡の基本層序に準ずる。

I a層	7.5YR4/1	褐色細砂混じり粘土層	III層	2.5Y4/1	黄灰色シルト混じり粘土層
I b層	5BG5/1	青灰色シルト混じり粘土層	IV層	5Y2/1	黒色シルト混じり粘土
II層	10YR5/2	灰黄褐色細砂混じり粘土層	V層	7.5Y7/3	浅黄色シルト混じり細砂

### 第2節 遺構（第26・27図、図版11・12）

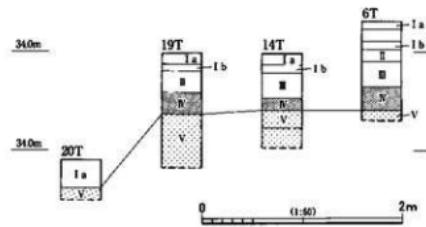
今回の調査で検出した遺構は古墳時代後半の溝であるSD001、中世以降の溝であるSD002、近・現代の水田跡SZ001である。ここでは、SD001、SD002について詳述する。

SD001は17～19トレンチで検出され、拡張した結果16トレンチの西側まで延びて終息する溝である。溝は19トレンチと18トレンチの間から始まり西進する。18トレンチ西端で緩やかに南に向きをかえ、16トレンチの南側で終息する。また、溝の北東端から19トレンチの北壁までやや深い溝が直角に延びる。この溝の北端は現直下に遺存している可能性があったが、崩落等の危険が考えられたため19トレンチの北壁までで調査を終了した。溝の断面は短冊形を呈しており、古墳時代後期の箱堀状四型溝<sup>1)</sup>と考えられる。

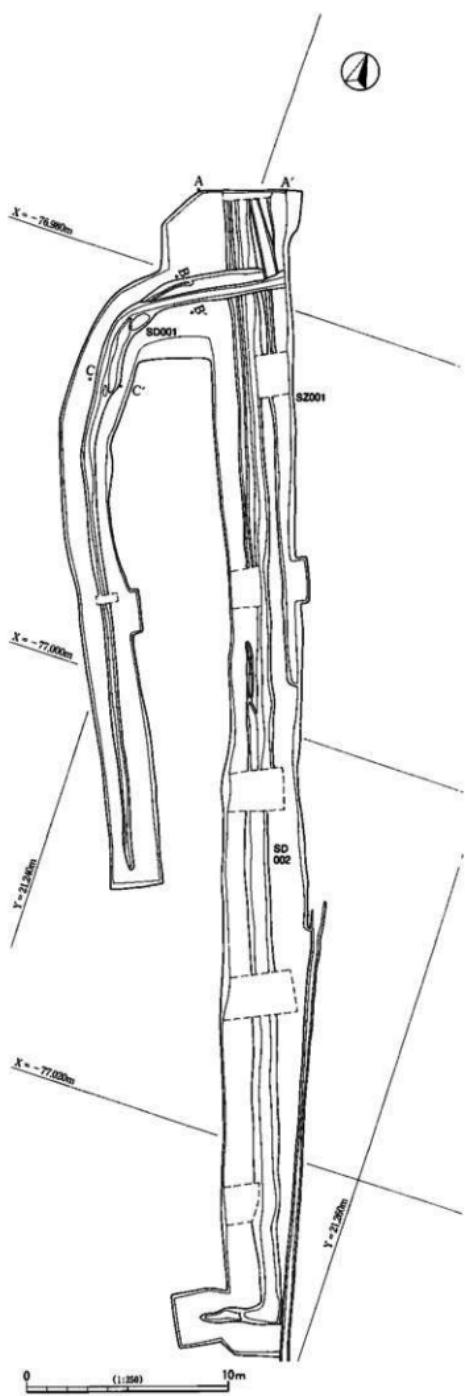
遺物は図示可能なものはないが古墳時代前期のものと思われる砂粒を含む土器片が数点認められた。

SD002は13・14・16～19トレンチで検出され、拡張した結果12トレンチと13トレンチの間まで延びた溝である。19トレンチ北壁からN-20°-Wと南南東の方向に直線的に延び、13トレンチと12トレンチの間で直交する溝に取り付いて終息する。直交する溝は西南西方向にはわずかに3m程延びて消滅し、東北東方向は調査区外へと続いているものと判断された。溝の断面は皿状を呈し、北半部では数条の溝が重なったようになっていた。

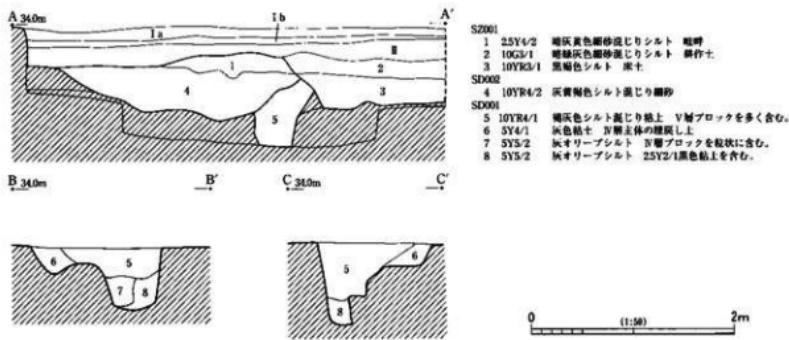
遺物は平安時代前半から近世までの遺物が含まれていた。



第25図 トレンチ・本調査区と基本層序



第26図 遺構平面図



第27図 溝状造構断面図

### 第3節 遺物

#### 1 土器 (第28図、図版12)

第28図1は灰釉淨瓶の肩部片である。SD002から出土した。ヘラ削りにより整形された注口基部が認められたため淨瓶とした。第28図2～5はSD002から出土した中世陶器である。2は常滑壺口縁部片である。ほぼ水平方向に引き出された素口縁の内面には沈線が見られる。3は常滑壺肩部片である。色調から2と同一個体の可能性が高い。4は瀬戸美濃四耳壺頸部片である。頸部径9.6cmを測る。6は瀬戸美濃折線深皿の底部片である。底径14.2cm、底部厚1.2cmを測る。第28図6～8は近世陶器である。6・8はSD002から、7は9トレンチから出土した。6は唐津碗底部片である。高台疊付を除き濃緑色の釉が掛かり高台内面には砂目が見られる。底径5.6cm、高台高0.9cmを測る。7は擂鉢口縁部片、8は擂鉢底部片である。7は長石粒が多く丹波産、8は長石粒が少量見られ堺・明石産であろう。

#### 2 土製品 (第29図、図版12)

第29図1・2は転用砥石である。いずれもSD002から出土した。1は須恵器壺胴部片で外面に平行叩き目、内面に擦痕が見られる。破面の2面が僅かに摩滅しており、転用砥石と判断した。縦5.3cm、横5.2cm、厚さ0.8cm、重量26.95gを測る。2は渥美壺胴部片で外面に平行叩き目が見られる。破面の2面が著しく摩滅しており、転用砥石と判断した。縦3.9cm、横5.1cm、厚さ1.5cm、重量21.15gを測る。

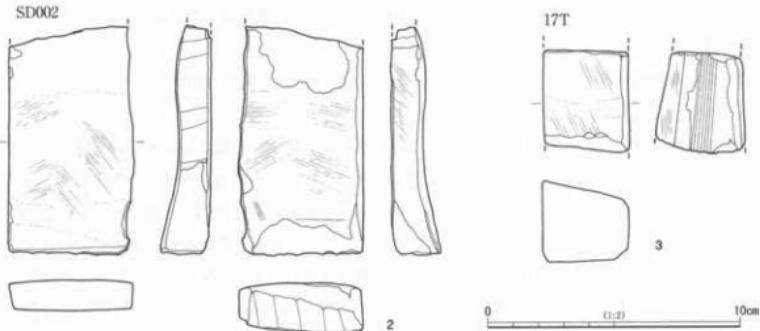
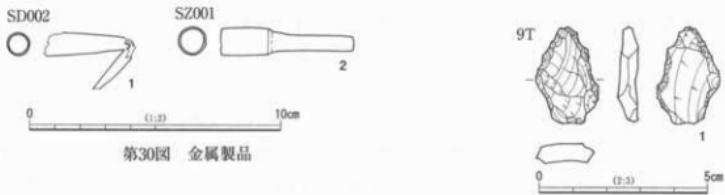
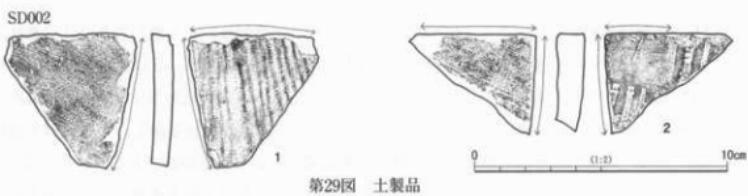
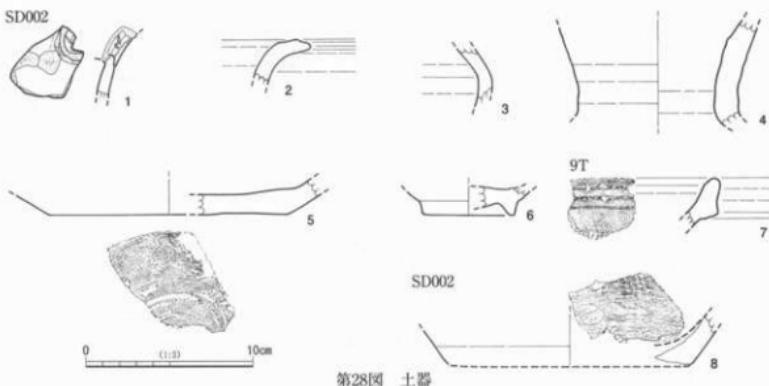
#### 3 金属製品 (第30図、図版12)

第30図1・2は煙管吸口である。1はSD002から出土し重量2.05g、2はSZ001から出土し重量8.35gを測る。

#### 4 石器・石製品 (第31図、図版12)

第31図1は繩文時代の石鐵の未製品である。9トレンチから出土し、長さ2.92cm、幅1.85cm、厚さ0.62cm、重量3.49gである。石材は黒曜石である。第31図2・3は中世以降の砥石である。2はSD002から出土し、現今の砥石と比較するならば中ほどで破損したものと考えられる。残存長9.1cm、幅5.0cm、厚さ2.0cm、重さ116.39gを測る。表面に凹凸が著しく主たる使用面と考えられ、裏面と左側縁にも擦痕が見られる。右側縁と端面には整形痕と見られる凹凸が認められる。石材は流紋岩であるが黒みを帯び安山岩質である。3は17トレンチから出土したもので両端が破面である。残存長4.1cm、幅3.4mm、厚さ3.3cm、重さ73.14gを測る。石材は凝灰岩である。

注1 今泉 廉 2006 「京都圏中央連絡自動車道想定文化財調査報告書5 - 木更津市丹通遺跡 -」 財团法人千葉県教育振興財團



## 第4章 まとめ

### はじめに

上新田張山遺跡の調査では中世初頭の掘立柱建物跡、櫛列跡・堀跡、井戸、区画溝が検出され、その切り合い関係や遺構の方位などから数時期にわたるものと判断される。さらに土師質土器の小皿や杯が主体ではあるが、貿易陶磁器、国産陶器なども出土し、既存の成果とあわせて曆年代の比定も可能である。これらの資料から時期の細分を行い、遺構の変遷と歴史的意義付けを試みたい。

### 遺構の時期変遷

各遺構とその時期についてはB・C区で検出された区画溝と判断されるSD017B・C、SD018B・C、SD025が平行して検出され、東端区画溝という同様の性格を持ちながら切り合い関係も有しておりこの部分から時期の細分を始めたい。切り合い関係は古いと判断されるものからSD025<SD018<SD017であるが、SD018は土層断面から2時期の可能性が考えられSD025<SD018（古）<SD018（新）<SD017という4期に時期細分が可能である。但し、溝の方位に大きな変化は認められない。

次に掘立柱建物跡や櫛列跡・堀跡についてみると、その軸方位や重なりから時期細分が可能である。SB001とSB002、SB006とSB007、SB009とSB010は重複しており同時期には成立し得ないし、SB004とSB005は調査区外で重複する可能性が高く同時期に成立する可能性は極めて低い。また、掘立柱建物跡の桁もしくは梁方位はN-0°～N-80°-Eと振れが認められる。区画溝と直交するN-45°-Eに近いものから徐々に真北、さらに西に振れるものへと変化するものと推察される。井戸についても溝や櫛、掘立柱建物跡との位置関係等により時期変遷が可能であり、SE001はSB006の西桁に平行するSD008の延長線上に位置しており同時期の可能性が高く、SE004は土層断面からSD025と併存した可能性が高い。

以上の諸点から下記のような時期変遷が想定される。

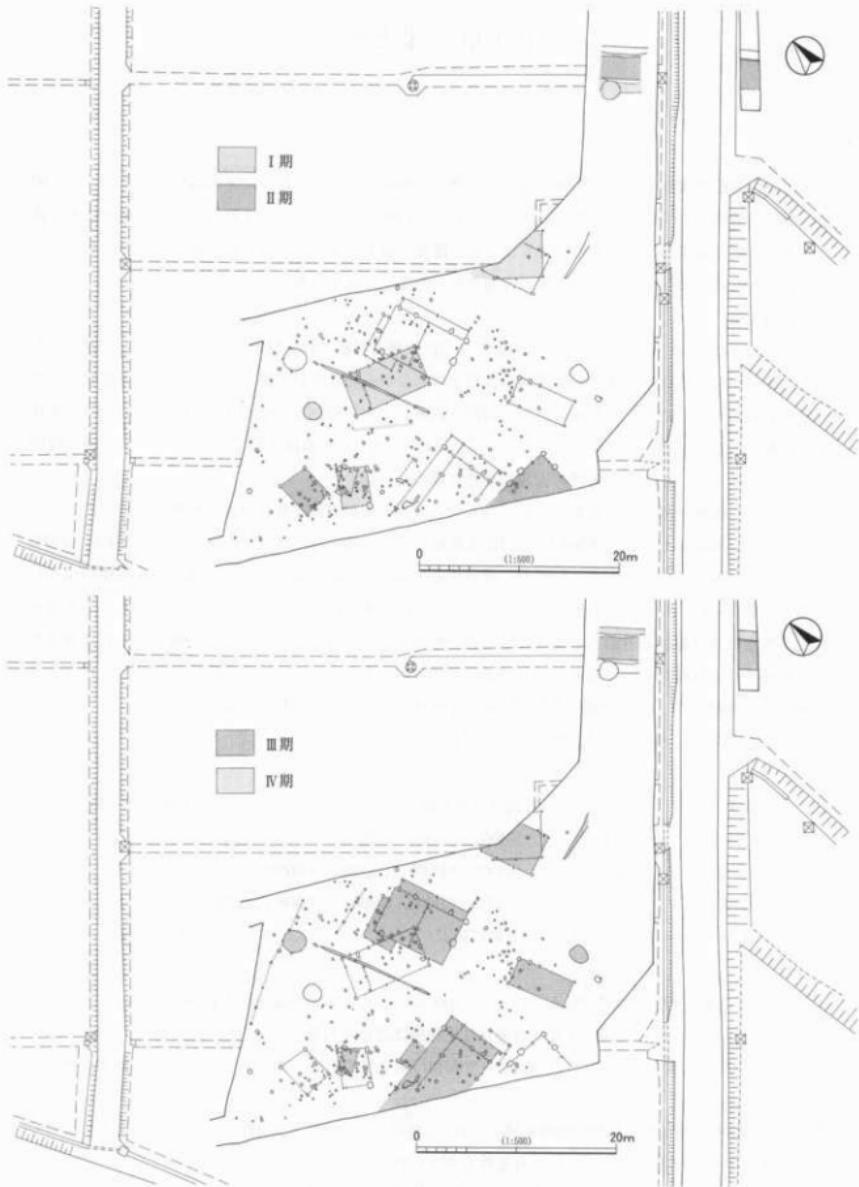
区画溝	井戸	掘立柱建物跡	堀跡・櫛列跡
I期 SD025	SE004	SB001・SB007・SB009	SA001
II期 SD018古	SE002	SB003・SB005・(SB007・SB009)	(SA001)
III期 SD018新	SE001・SE003	SB002・SB004・SB006・SB008・SB010	SA002～SA005
IV期 SD017	III期に同じ	III期に同じ	III期に同じ

I期には、区画方向に屋敷地が形成される。SA001により、A区内が北東半と南東半に分けられていた可能性も考えられる。調査地内には大型の掘立柱建物跡は認められない。

II期には区画溝が掘り替えられ、SB005とやや大型の掘立柱建物跡が出現し、特にA区南西部を中心に充実が図られる。

III期はSB006やSB004など大型の建物が建てられ、全体的に充実する。SD008により東半と西半に分けられ、階層差の少ない屋敷が並立していた可能性も考えられる。

IV期は建物群に大きな変化はないものと考え、区画溝のみが掘り替えられたものと考えられる。



第32図 上新田張山遺跡中世初頭遺構変遷図

## 出土遺物の時期

この時期の房総地域の土器様相については、笹生衛氏の研究がある<sup>1)</sup>。氏は中世初頭から戦国期前半以前の上総地方を中心とした県内の中世遺跡を対象とし、供膳形態と貯蔵・調理形態の組成による3段階を設定し、さらに各段階を細分することで縄年案を提示され、房総の中世遺跡の研究に画期をもたらしている。各段階はⅠ期：貿易陶磁器と土師質土器の供膳具に渥美・常滑の貯蔵・調理形態がみられる時期、Ⅱ期：貿易陶磁器・瀬戸・土師質土器の供膳具に常滑の貯蔵・調理形態がみられる時期、Ⅲ期：瀬戸を主体とし貿易陶磁器・土師質土器を含む供膳具、瀬戸・常滑の貯蔵・調理形態がみられる時期に整理されている。今回の調査では、土師質土器を主体とする供膳形態に僅かに貿易陶磁器が見られ、渥美・常滑の貯蔵形態が含まれることからⅠ期にあたるものと判断される。さらに笹生氏はⅠ期を供膳具である土師質土器杯の形態と貿易陶磁器から3小間に細分し、Ⅰ-1期：土師質土器杯A類、Ⅰ-2期：土師質土器杯B・C類と龍泉窯系青磁碗I-1～4類、Ⅰ-3期：土師質土器杯B・C類と龍泉窯系青磁碗I-5類とし、特にⅠ-3期には貯蔵・調理形態の中で常滑が主体をなすとしている。土師質土器杯A・B・C類の各形式はA類：底部を柱状に厚く切り残し、体部は強く内湾、口縁端部が外反するもの、B類：底部を柱状に厚く切り残し、体部は強く内湾するが、口縁端部の外反は見られず、器面にロクロ目が強く残されA類と比較してロクロ目が少ないもの、C類：体部中位が強く内湾し、そのまま口縁部に致るものとしている。今回の調査で出土した杯で全体の器形がわかるものはSD018Cから出土した57のみであるが、体部の内湾や口縁端部の外反がやや弱いものの細かなロクロ目が見られる点はA類に類似している。底部を欠くが58も同様である。一方、口縁部片の22、59、87～89は口縁端部が内湾するものもあるが、ロクロ目が粗い点はB・C類に類似するものと判断される。以上のように今回の調査で出土した土器類は笹生編年I-1期（12世紀第3四半期）からI-2期（13世紀第2四半期～第3四半期）のものと思われるが、完全な一致を見ない点は今後の課題としたい。貿易陶磁器については森田分類<sup>2)</sup>にあてはめると147：同安窯系青磁皿I-2類、146・148：龍泉窯系青磁碗I-4類、145：龍泉窯系青磁碗I-5・b類が見られ、Ⅲ期の1小期（12世紀中葉～13世紀初頭）、2小期（13世紀中葉）とこの点においても齟齬のないことから、本遺跡の時期は雑駁ではあるが12世紀中葉から13世紀中葉の曆年代が充てられる。

## 中世初頭の上新田張山遺跡の性格

以上見てきたように出土遺物は12世紀中葉から13世紀中葉の遺物という極めて限定的な期間に集中していることがわかり、遺構はその時期細分から12世紀中葉から後葉にかけて徐々に整備され、13世紀中葉の早い段階に消滅したものと判断される。この点は過去に実施された君津市教育委員会の調査地の成果<sup>3)</sup>と同様である。該期のこの地域の歴史について概観するならば、12世紀中葉のこの地域の実質的な支配者は上総権介広常とされる。ところが、寿永2年（1183）末、上総権介広常は誅殺され、所領の大半は没収されて配下の御家人たちに与えられた。寿永2年以後の実質的な支配者については、『吾妻鏡』（北条本）文治2年（1186）6月11日条から上総介足利義兼、和田太郎義盛が考えられており、前者が畔蒜北庄、後者が畔蒜南庄の地頭職と考えられている<sup>4)</sup>。なお、前者の上総介足利義兼については相馬介（上総介）貞常（定常）とする説もある<sup>5)</sup>。実質的な支配者と考えられている和田義盛は健保元年（1213）の和田合戦で滅び、貞常に代わり上総介を繼承した千葉秀胤は宝治元年（1247）の宝治合戦で三浦氏に連座して滅びており、13世紀前半にこの地域の実質的な支配者層に大きな変化があったものと考えられる。

それでは、上新田張山遺跡の中世遺構にはどのような性格が考えられるのか。この点においても笹生衛

氏の研究がある<sup>6)</sup>。氏は小糸川中流域の中世遺跡を対象に中世村落の景観変化と画期を提示しておられる。小糸川は本遺跡の立地する小糸川の南西に位置し、房総丘陵においてはともに東京湾に流入する姉妹川と呼んでも過言ではない川であり、自然環境や中世東国を中心とする鎌倉と東京湾を隔てて対峙するという地理的環境においても非常に近似した環境にある。氏の研究成果から当該時期に関連するものを抽出すると以下のとおりである。

1. 屋敷地は出土遺物や造構の規模・密度から、C類型：継続的な領主層・有力名主層の屋敷地、B類型：継続的な中小名主や有力小作人の屋敷地、A類型：短期間で小規模な作人層の屋敷地の3類型にわけられる。
2. C・B類型屋敷地を中核として間に耕地を介在しA類型屋敷地の付属する緩やかな集合としての屋敷群が復元される。
3. 13世紀代に比定される屋敷群に比較して14世紀代に比定される屋敷群は少なく、屋敷地の移動による景観変化が進行し、14世紀後半には、街路型集村：道路に沿って集中する屋敷群、小塊村型集村：中世前半の屋敷地の固定・拡大による屋敷群の2類型が形成された。

本遺跡においては区画溝をどのように捉えるかが問題ともなろうが、全体をC・B類型もしくはSB004～SB006を中心とする建物群をC・B類型、SB009・SB010をA類型と考えることもできよう。窪地を挟んで既に調査されている地点も屋敷群の中に含めることができあり、笠生氏の言う「間に耕地を介在させた屋敷群」が復元され、13世紀中葉には衰退するものと判断されることから屋敷地の移動による景観変化が進行したものと捉えられる。なお、本遺跡から出土した該期の遺物の大半を占める土師質土器は近年、儀礼的あるいは宗教的な共食の場で使用され、その機会などが多い格上の遺跡ではその出土も多いとの考えも提示されている<sup>7)</sup>。完形品が皆無であり、意図的に破碎したとも思えるような破片が存在する点は上述の共食の場での使用を示す可能性もあり、本遺跡が在地の支配者層に直接関係する遺跡と考えるならば、その変化が遺跡の消長に関わったものと考えることも可能であろう。

#### 結語

上新田張山遺跡の中世初頭の屋敷地は隣接する小糸川流域で確認された中世初頭の村落景観と酷似しており、その消長も中世村落の景観変化と軌を一にしている可能性が高い。しかしながら、本地域の実質的な支配体制の変化の時期とも一致しており、その推移が本遺跡の消長に大きく影響した可能性も考えられる。本遺跡内の周辺調査が進むと同時に周辺地域の遺跡と対比されることにより、本遺跡の性格が更に鮮明となることと思われる。上総地域は鎌倉幕府の成立と展開に大きく関わる地域であり、今後の調査研究に期待したい。

注1 笠生 南 1991「房総の中世土器について」『史館』第23号 史館同人

2 横田賛次郎・森田 魁 1978「大宰府出土の輸入中国陶器について－形式分類と編年を中心として－」『九州歴史資料館研究論集』4 九州歴史資料館

3 松本 肇 1997「平成8年度 千葉県 君津市内遺跡発掘調査報告書」君津市教育委員会  
納城秀喜 1998「平成9年度 千葉県 君津市内遺跡発掘調査報告書」君津市教育委員会

4 竹内理三編 1984「角川日本地名大辞典 12 千葉県」株式会社角川書店

5 野口 実 2000「中世東国武士社会における苗字の継承と再生産－吉川本『吾妻鏡』文治二年六月十一日条の「相馬介」をめぐって－」『千葉氏の研究』第二期 同家武士研究叢書5 株式会社名著出版

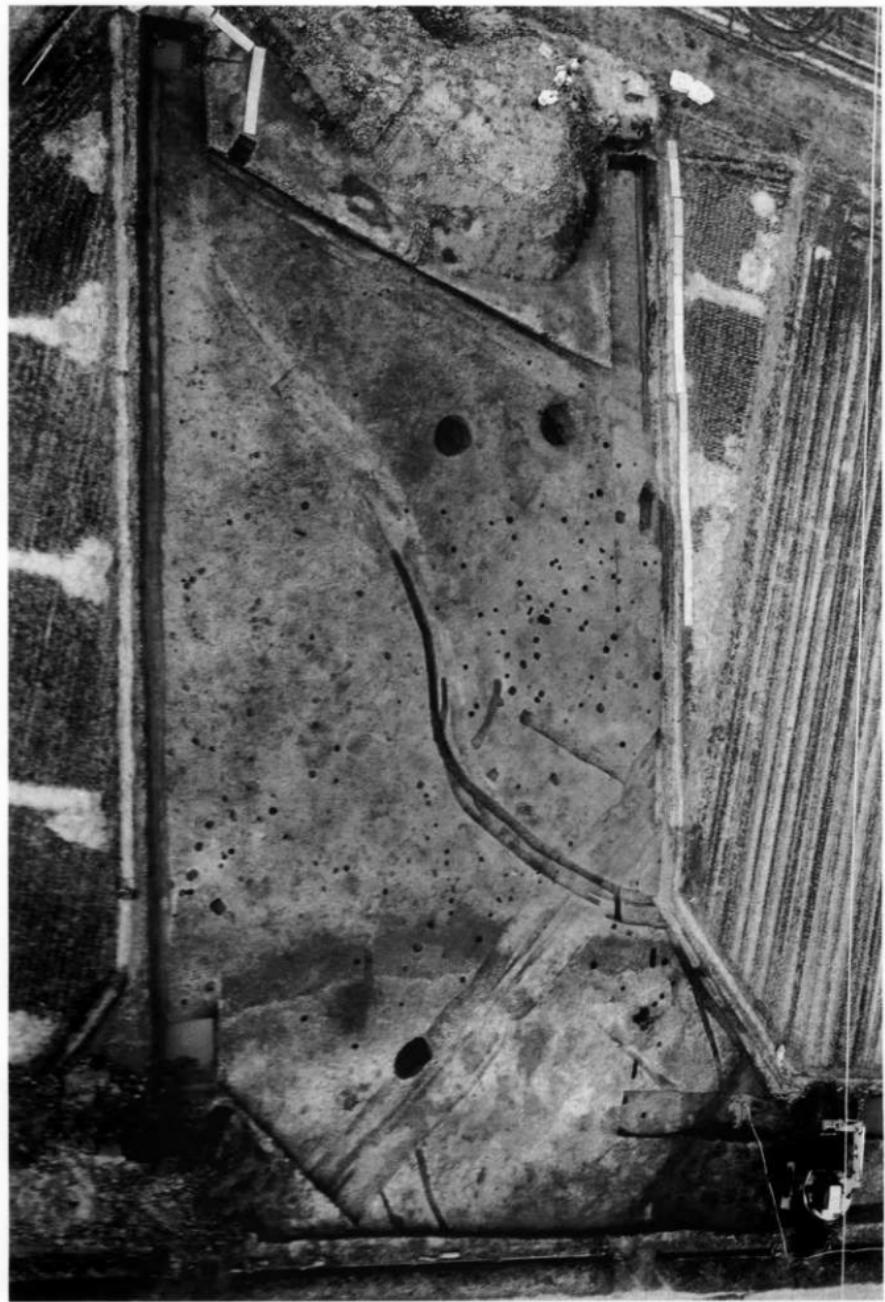
6 笠生 南 1999「東国中世村落の景観変化と画期－西上総、周東・周西部内の事例を中心に－」『千葉県史研究』第7号 千葉県

7 宇野隆夫 1997「中世食器様式の意味するもの－計量分析による使用法の復元－」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71号 国立歴史民俗博物館

# 写 真 図 版



1. 調査地周辺の航空写真



1. A区空中写真



1. A区全景



2. A区西半上面全景



3. SD007 完掘状況

図版4 上新田張山遺跡



1. SE001 完掘状況



2. SE002 完掘状況



3. SE002 断面



1. SE003 完掘状況



2. SE003 断面



3. B区SE004 断面

図版6 上新田張山遺跡



1. B区SD017B・018B・025 完掘状況



2. C区SD017C・018C 完掘状況



1. B区SD017B・  
018B・025 断面

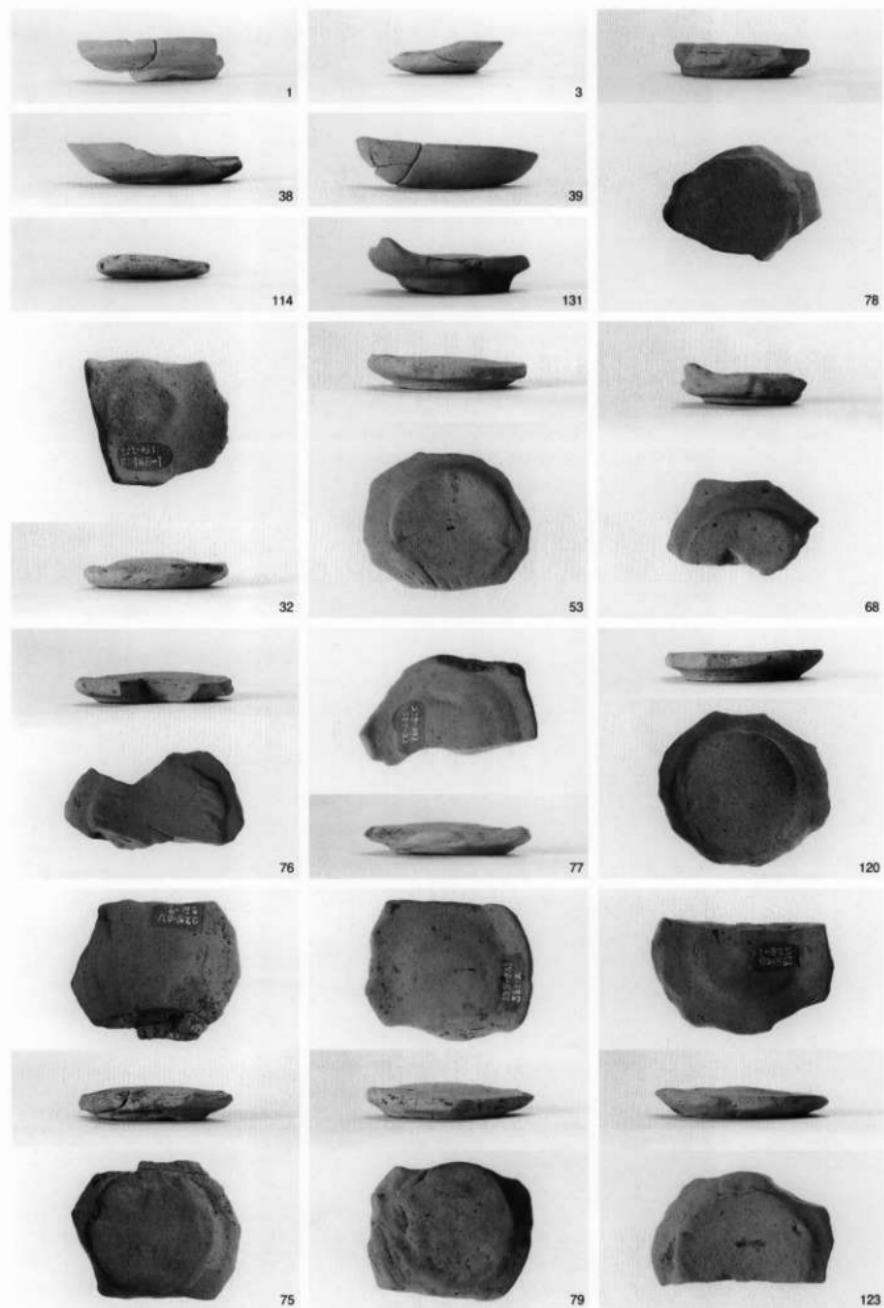


2. C区SD017C・  
018C 断面

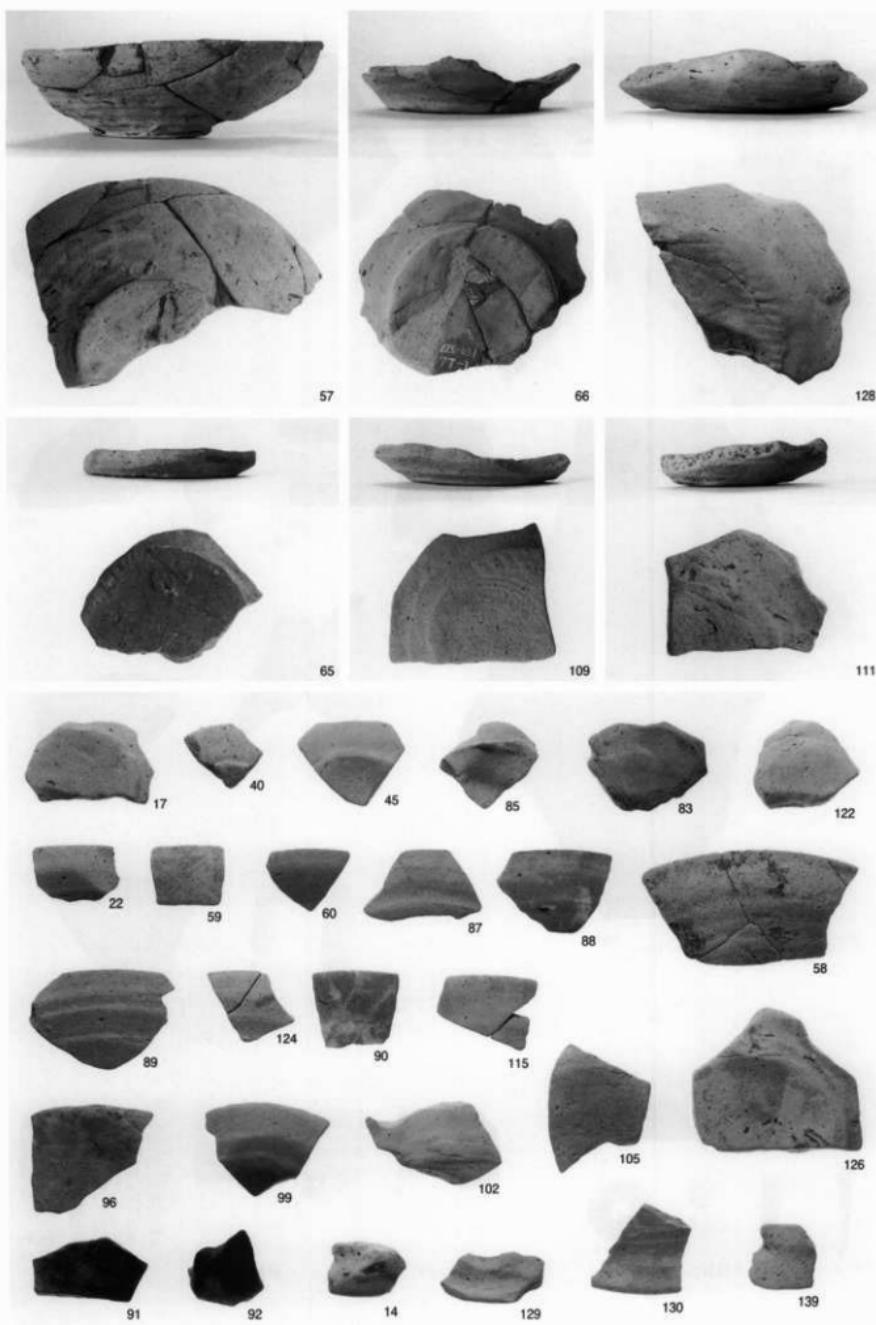


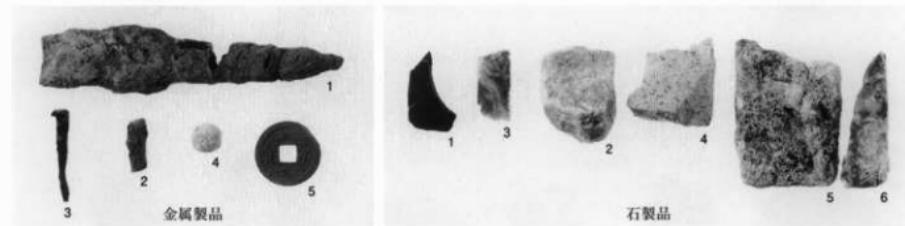
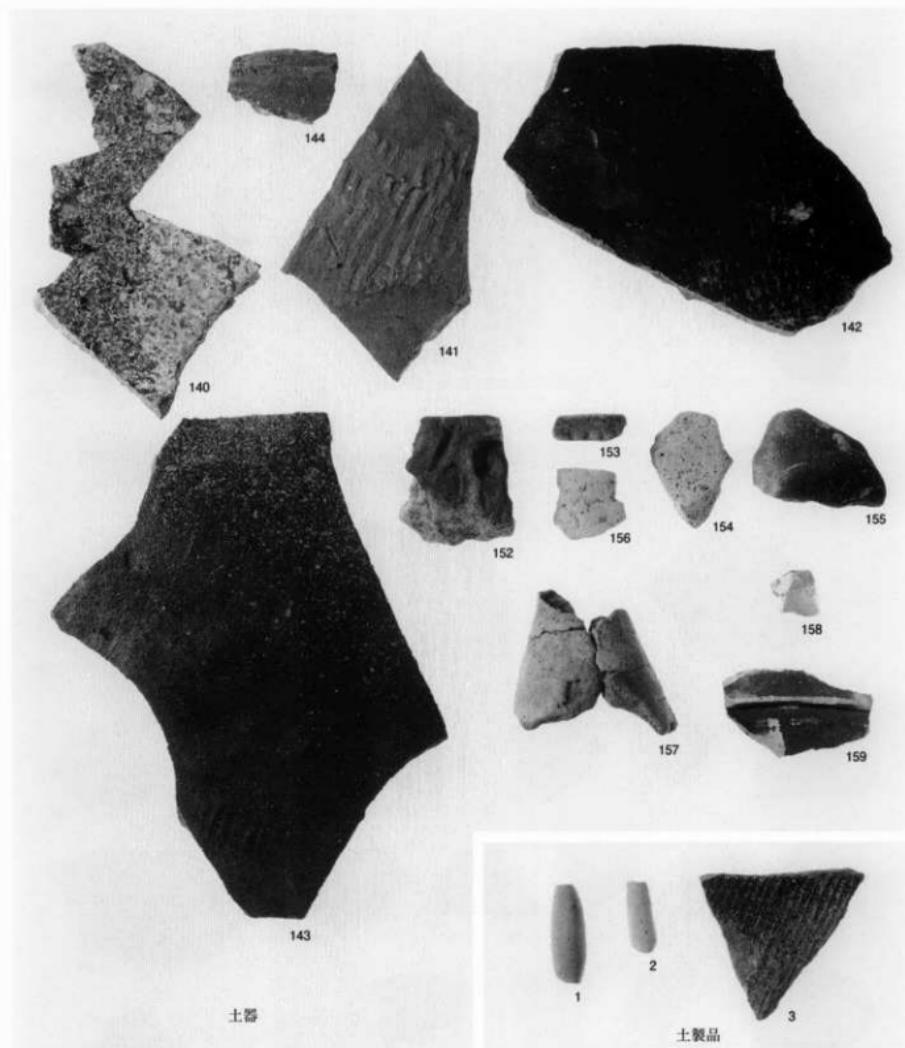
3. C区SD019～  
024 完掘状況

図版8 上新田張山遺跡



土器 1





土器3・土製品・金属製品・石製品



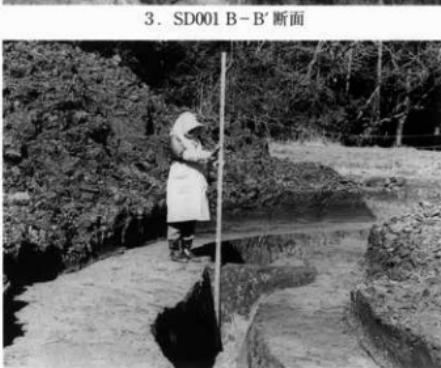
1. SD001・002 完掘状況



3. SD001 B-B' 斷面



2. SD001 完掘状況



4. SD001 C-C' 斷面

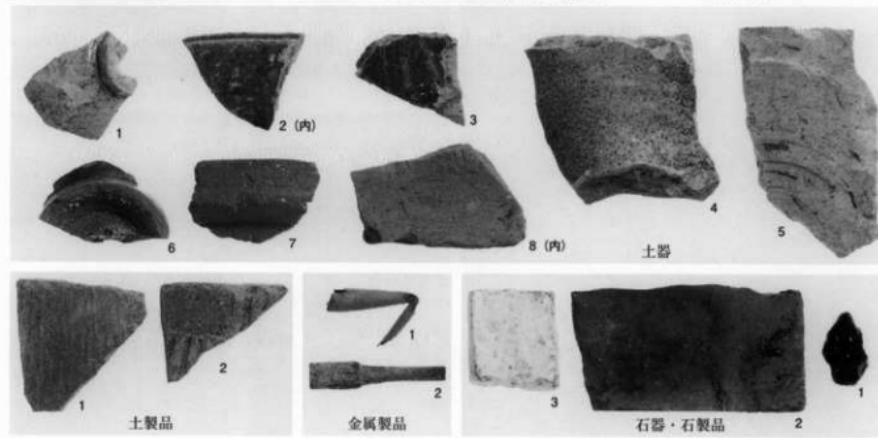
図版12 青柳向台遺跡



1. SD001・002 A-A' 断面



2. SD002 完掘状況



3. 土器・土製品・金属製品・石器・石製品

**報告書抄録**

ふりがな	こくどうどうろかいちくいたく(くるり)まいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ
書名	国道道路改築委託(久留里)埋蔵文化財調査報告書
副書名	君津市上新田張山遺跡・青柳向台遺跡
卷次	2
シリーズ名	千葉県教育振興財團調査報告
シリーズ番号	第587集
編著者名	半澤幹雄
編集機関	財團法人千葉県教育振興財團 文化財センター
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809番地の2 TEL043-424-4848
発行年月日	西暦2007年9月28日

所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
上新田張山遺跡	君津市俵田字張山24-2ほか	12225	031	35度 18分 27秒	140度 03分 54秒	2006.10.16～ 2006.12.14	2,700m <sup>2</sup>	道路建設に伴う 埋蔵文化財調査
青柳向台遺跡	君津市筍輪字菊沢998ほか	12225	032	35度 18分 18秒	140度 04分 01秒	2006.12.17～ 2007.01.31	2,800m <sup>2</sup>	道路建設に伴う 埋蔵文化財調査

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上新田張山遺跡	包蔵地	縄文 弥生時代	溝状遺構 掘立柱建物跡、横列跡・塙跡、井戸、区画溝	縄文土器(中期) 弥生土器(後期)	中世初頭(12世紀中葉から13世紀中葉まで)の掘立柱建物跡や井戸、区画溝を検出し、該期の屋敷地が明らかとなった。
	生産集落	古墳時代 中世初頭		土師器(前期・中期) 土師質土器・陶器・貿易陶磁器、刀子・鉄釘・燧石・砥石	
	生産	近世以降		陶器・錢貨・砥石	
青柳向台遺跡	包蔵地	縄文 弥生時代	溝状遺構	縄文時代石器(石鎚) 弥生土器(後期)	
	生産	古墳時代		土師器(前期)	
	包蔵地	奈良・平安		土師器・須恵器・灰釉陶器	
	生産	中世以降		陶器・砥石	

要約	小櫃川中流域の右岸段丘上に立地する上新田張山遺跡及び青柳向台遺跡の調査報告書である。国道410号線バイパス建設事業に伴い調査されたものである。上新田張山遺跡では中世初頭の屋敷群に伴う掘立柱建物跡、横列跡・塙跡、井戸、区画溝を検出し、土師質土器・杯を主体に国産陶器や貿易陶磁器が出土した。また、上新田張山遺跡と青柳向台遺跡の両遺跡で古墳時代後半の農耕に伴うと思われる溝(箱堀状凹型溝)を検出した。
----	---

千葉県教育振興財團調査報告第587集  
国道道路改築委託（久留里）埋蔵文化財調査報告書2  
—君津市上新田張山遺跡・青柳向台遺跡—

---

平成19年9月28日発行

編 集 財團法人 千葉県教育振興財團  
文化財センター

発 行 千葉県県土整備部  
千葉市中央区市場町1-1

財團法人 千葉県教育振興財團  
四街道市鹿渡809番地の2

印 刷 株式会社 正文社  
千葉市中央区都町1-10-6

---